なくさみ草 一

内閣文庫
和書 類
一八九五六 號
八 冊
二〇三 函
一七 架
（一ノ八）

内閣文庫
番號 和 18956
冊數 8（1）
函號 203 130

203-130

綴じ部（喉部分）の文字等が開きが不鮮明な場所あり
白紙のページが続く箇所があり、白紙箇所は省略

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

つれ〲草　徒然とかくさひしき心
綴之第八　此草かゝる草紙の題也
日くらし　終日の儀なり
記日くらしより山路のきのふ時雨しハ
富士のふもとの雪のそらにけり
硯にむかひ　風雅集ニ
何となく硯にむかへは知るよ
心にうつりゆく　心ハ鏡の如ク萬
境うつり来ると云　不説あり
よしなしこと　由来なきこと
そこはかとなく　そことしもなくこ
そつハ晤徳なり
神無月風に紅葉のちるときハ
そことなくそ物そ悲しき
ものくるおしけれ　謙退辞也
先まて　此草子の序なり
いてや　発語のことはなり

つれ〲なるまゝに日くらし
硯にむかひて心にうつりゆくよ
しなしことをそこはかとな
くかきつくれはあやしうこそ
物くるおしけれ。いてやこの世に
生れてはねかはしかるへき
事こそおほかめれ。みかとの御
位はいともかしこし。竹の園の末
葉まて。人間のたねなら

日本政府圖書
淺草文庫
和學講談所
内閣文庫

いともかしこし　寂くゝしけるし
といふ心可畏と書てかしことよめり
竹の園生の末葉まで　竹園
とは親王の事也　皇孫の
すゑ／＼までといふ心なり
人間の種ならぬぞ
此花是非人間種再養平
臺一片霞此花是非人間種
瓊樹枝頭第二花
みな親王の事なり
やんごとなき　おもくらう云ふ也
せ止とくなり
一の人　摂政関白をいふ也
職原鈔曰執柄必蒙一座之
宣旨故称一人
さらなり　猶更の儀し
たゞ人　摂家乃外はみなたゞ
人なりされとも其子孫

ねぞやんごとなき。一の人乃御有
りさまはさらなり。たゞ人も。と
ねりなどたまはるきはゝゆゝし
とみゆ。その子。むまごまでは。はふ
れにたれど。なをなまめかし。それ
より下つかたは。ほどにつけつゝ
時にあひ。したりがほなるも。自
らはいみじとおもふらめど。いと口
をし。法師ばかりうらやましから

まではそれ／＼にまさとゝお
近衛ハ羽林家の中少将をさ
して可心得
とねりなど　舎人の名人ハ随
身也是をば府乃随身と云
此ゆるされを蒙りてつる
なり小随身ハ家にもあり
なまめかし　おちかれる義也
身なれてつゝ心をたのむも　時
つかぬハいひつかへども　家人く
なめかし　やさしき心なり
秋乃野になまめきたてる女郎花
あなかしかまし花も一とき
それより下つかたは　六位五位
それより志もつかさハ
殿上人受領などのたぐひなりし
清少納言　肥後守清原元輔
かむすめ一條院の皇后に
つかへし女房なり

からぬものはあらじ。人には木のは
しのやうにおもはるゝよと。清少
納言がかけるも。げにさることぞかし。
いきおひまうにのゝしりたる
につけて。いみじとはみえず。増
賀ひじりのいひけんやうに。名
聞ぐるしく。仏の御をしへにたが
ふらんとぞおぼゆる。ひたぶる
の世捨人は中々あらまほしき

いきかひけるはのしるし也
りうハ猛の字なり。志るハ智
の字也時にあひてゐせいあ
る心なり
諫をしるし　平安城人諫
議大夫橘恒平之子也和歌
多武峯の便にて撰集抄ニ
詳也又元亨釋書ニ傳アリ
さとりて　さとりすゝむのゆゑ
一向と申ハ
みなひとへにたのむのちからもひとへ
君のかゝるところのよるところなり
あひきやう　愛敬と申也
そのしるしとなる人乃ちからよ
あふ世のえらる品祿の人とへだて
本性　生れつきの　天性と
志れうそちゝて生れつきてあ
志れとかくちゝとかくと評論

うゝもあり。かんじんハかうさうあり
さ海のゝすゑれいうんこうあう海か
しろ人かれ。おうらいひろうき
きうのくうさず。あいきやうありて。
云爲にあおりぬよろづあみすもの
ハ海わしくれめてさしとろへの
人の心をとりせうくし。本性乃
えんろ。以行しろへかれ。志
れうそちゝてそ生れつきたるめ。

したるこし所詮心ニ帰ス也
三界唯一心の文よおいて
かうこきたり　賢賢易色いよ
しんのみとしよあうなさ
さえんするく　辞也
志るまくなり　日本記大夫ニ此上
各有差降
みけす　度量にねえし
文のみ　讀書学問のみなり
有識　ともたろ事ありとよむ
云事　あやまちをこしらへぬり禁
中のまつりことなり
人乃後　唐書魏徴薨太宗臨
朝難曰以銅為鑑可正衣冠以
古為鑑可知興替以人為鑑
可明得失朕常保此三鑑内
防己過今魏徴亡鑑亡矣

心ハ万よろ。賢よりゝ。賢ゝのもとつさ
いうこさらん。かゝうち心さ海のあき
人もさゝえすくわされて。志るく
よりかゝにしさけするへもる。
立海しつそとうけすきをとさまく
こうかいすにさとさされ。おろさ
さゝるのそ。海とこしさき。文の道
作文。和歌。管絃のみ。文有識
み。云事なりこ。人の後見するんこ

ちらまうき　真ハ衣冠をし
き袮行ハおりく袮並ハ人
みちは袮すり

うぐひすかゝれぬあとつて
あふすぱりまうきぬるおこし
くそ゜拍子(ひやうし)とりて演しうすう
をみつけてあつぬこうおのこ
ハよろこれ

第一段大意

此草紙の名をさしもく草と号し浮事兼好法
師大かた浮世の風俗をあまねく心にうかむよし
なしごとを我手書けまではとかまはば此兼好一部
の心に通ずるかいでや此世に生れてのぞといふは
皇一の人あさまりといへまでも俗骨の青雲
とさへなまめかしきなりまで六根がはしかるべし
ことのはじめはまぬがれどもやむかりの
心すでさし至るり人まといふなりはうらや
ましきなをも我心しつひとりのせんよう
ものそ梅くといふ事なりさて人間の要
とるべき法師の分をまもりうやましかね

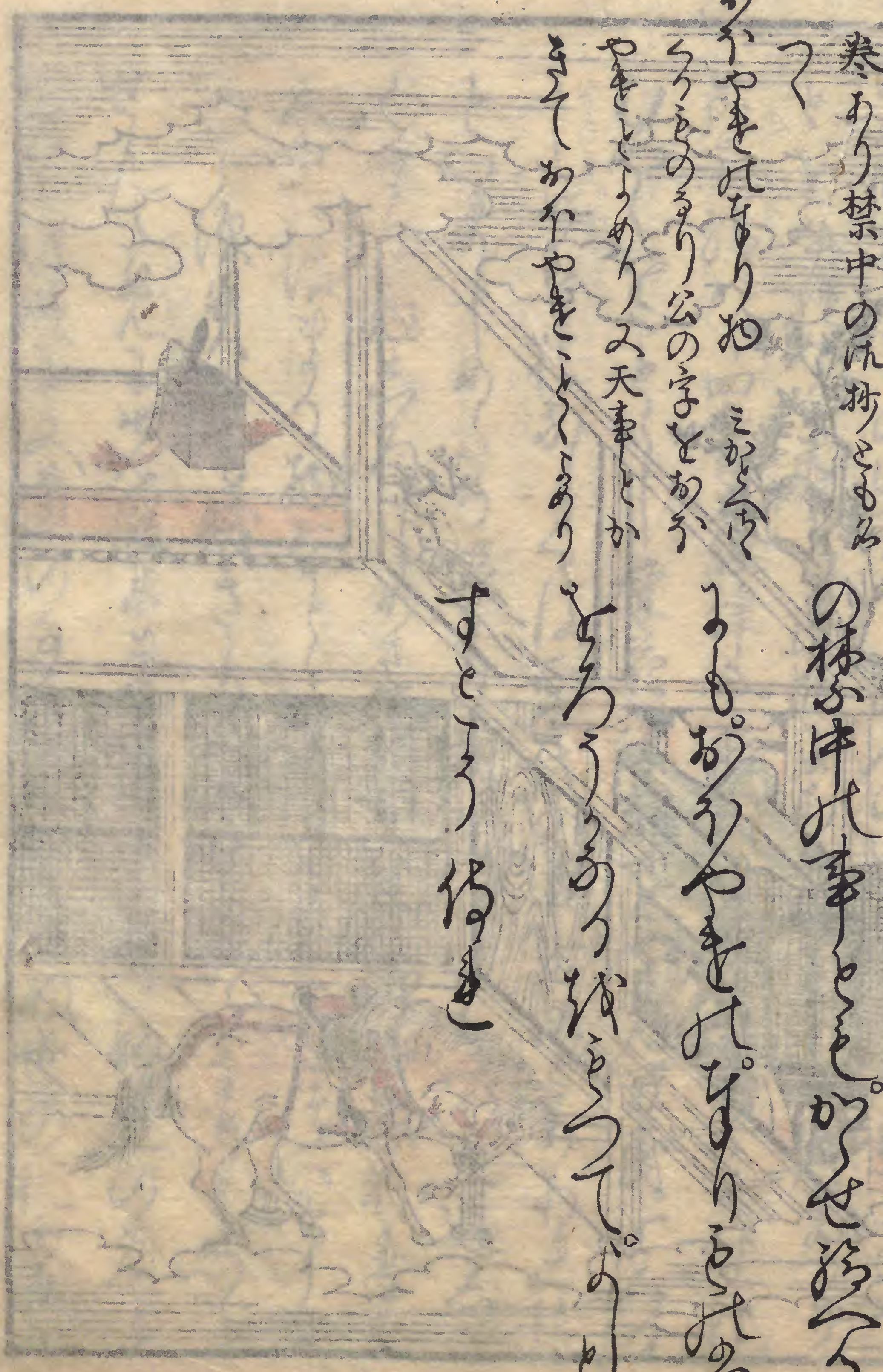
ものと出家して我わざかゝぬ筆法なれば此段は
上戸とわめておくのよさけをいましめたる例
成べし又まゝとしき文の道と詩道のたゞし
めに出家しるかゝ人の蚊蛸まではかすみへかゝりて
いのはかりむかしくとも儒門にいまたといふこと
なり世の中の人ともしいくすがに智者ぶりやう
らやましきもののはやりとなりての人もさ迦
ふみやあらん論語のさしはに学而の篇をみ
けつま又賢きよりかしこがむとすればの子夏
の羽孔子の御弟の次にかんぞりこれ子夏が名
登なり又易色よといふことをとうさはまとう
ろうきつむかしはさうしみやうけらまとう

も又兼好の名誉にあらすとや

古(いにしへ)の聖(ひじり)の御代の政(まつりごと)をも忘れ民(たみ)の愁(うれへ)国のそこなはるゝをも知ず万にきよらを尽していみじと思ひところせきさましたる人こそうたておもふ所なく見ゆれ。衣冠(いくわん)より馬車にいたるまであるにしたがひて用ゐよ華麗(くわれい)をもとむる事なかれとぞ九条殿の遺誡(ゆいかい)にも侍る。順徳院(じゆんとくゐん)の禁中の事ども書かせ給へるにも。おほやけの奉り物はおろそかなるをもてよしとすとこそ侍れ

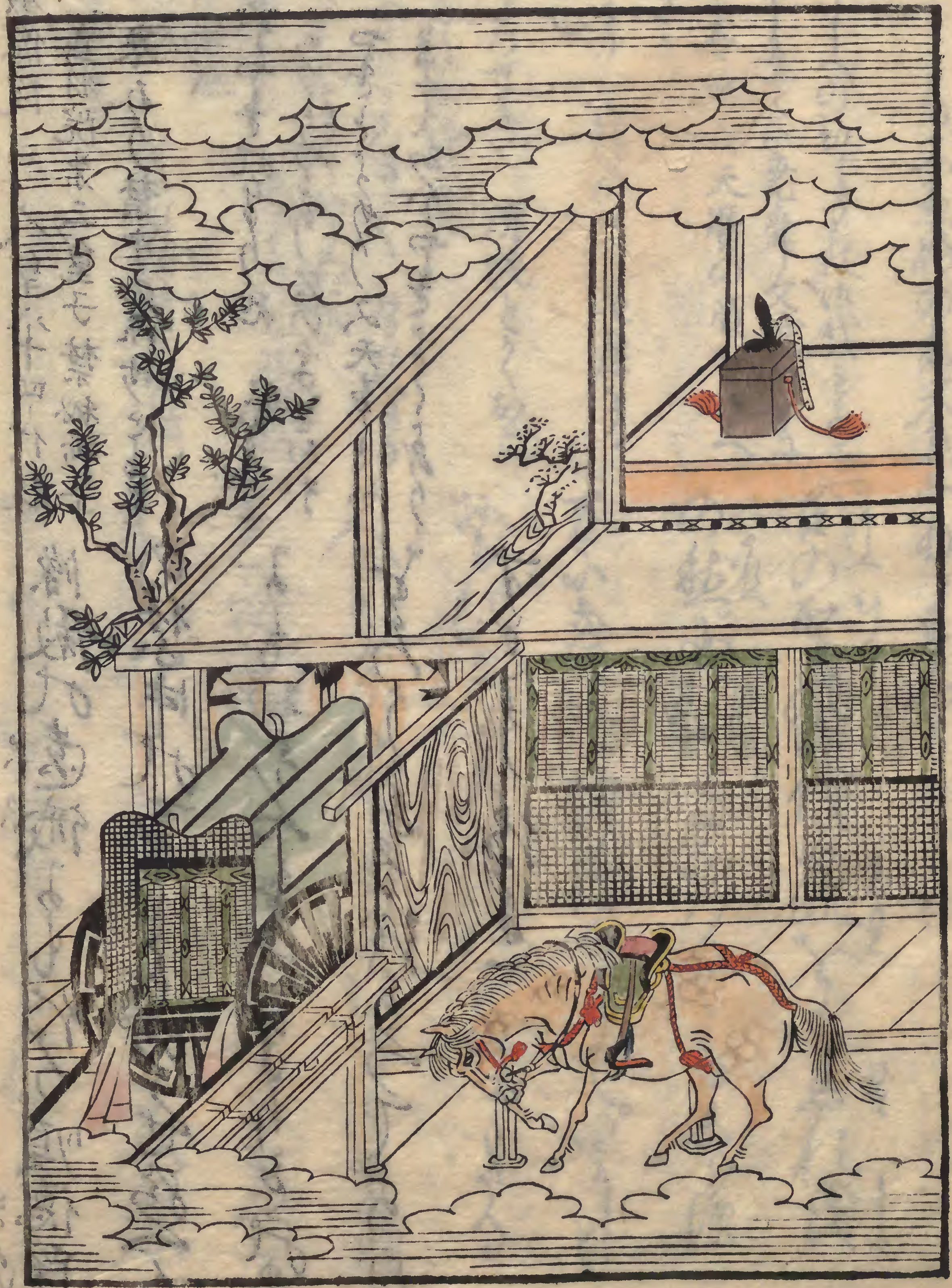
いにしへの聖の御代とはもろこしにては堯舜文武日本にては延喜天暦の帝をさしていふ
きよら　清の字也花麗なる心也
ところせき　所狭とかくおごりたる体也
おもふところなく　おもひつきなくきさんじなからぬ体也
衣冠より　是より九条殿の遺誡也御詞(コトバ)也
九条殿　右丞相師輔(モロスケ)公の作一巻あり

順徳院　人皇八十四代後鳥羽院第三ノ皇子禁秘抄二巻あり禁中の御抄ども也
おほやけの奉り物　みかどの御ころものおり公の字をおほやけとよめり又天子とかきておほやけともよめり



第二段

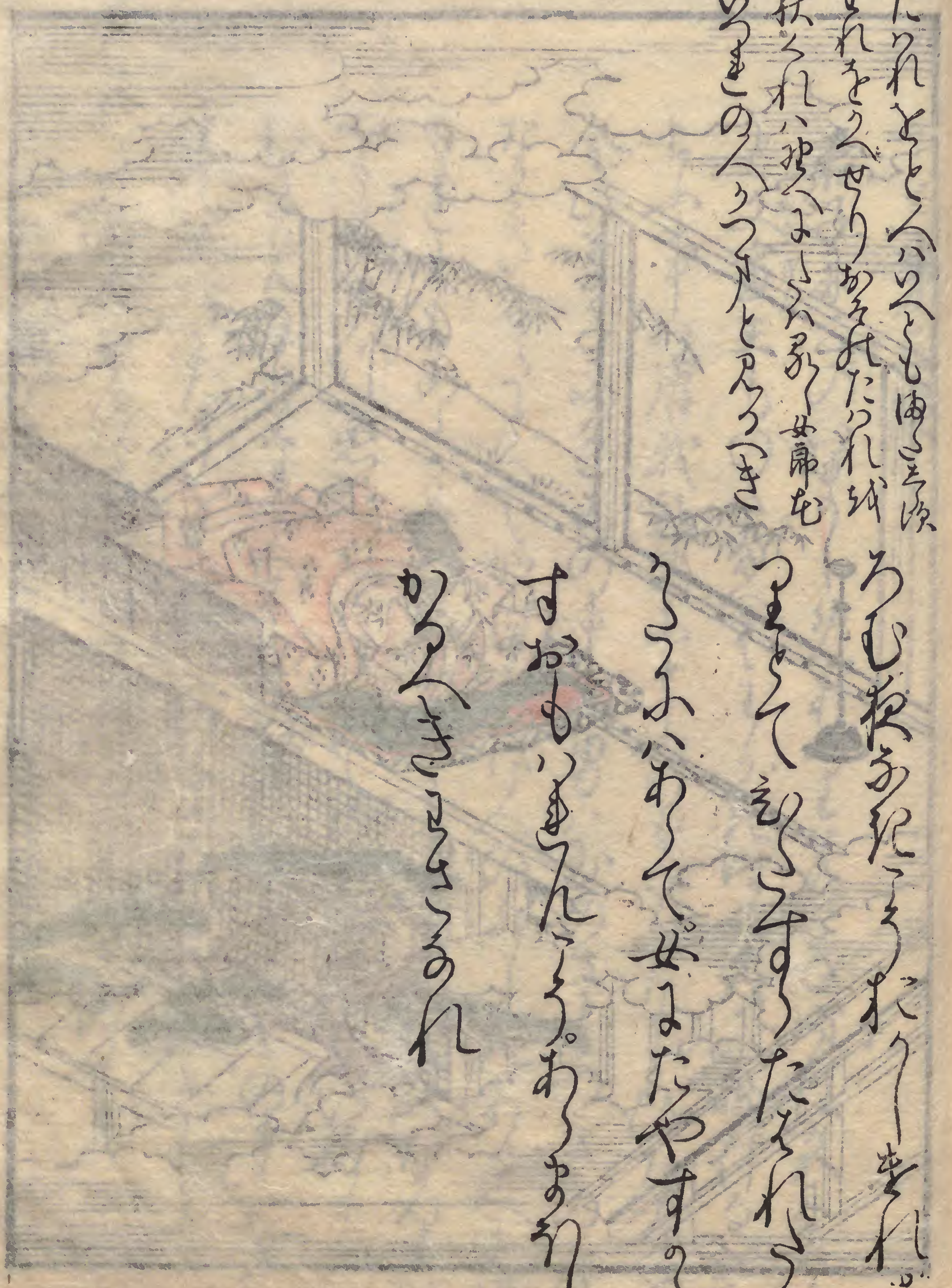
此段はみかどの御事と上の人のいましき御身のか
とゞを申侍るべく候へく此段よおもんじて仕まつり
おち給ひて四書五経律令格式の文にまかせたすけ
むやくとせし栄花栄耀をやめん万民をそろ
しめよと也さらくは聖代の名を流とりあまねし
といましめらる段なり詞はみじかくて王道をこ
くせり抑天子のしめさても一旦は御果報あまたえ
天下は治まる抱なりといかりそめにも治はいそうは
へり須臾も賎きも文学をわかつすりとぞ
せんとせんに先段にまかせもしきは物見の左とも
世して此段は文道のすくて　かなはぬ世のれさまん



やもとかゝる住居のやとはしけて人住ゐるへし

さうし窓 寂寞(セキハク)とうきまりさ
ひしき筆さこそまてハと
うぬひまうへし
むのさりつきこのえこうきき 云庵
無當(ムツコ)桂華無實 當ハ底也
あふさきうさ 往さ来さ也
こゝろさうまてよ推ひ足さ
徐なり八雲抄よとするを
かくすふもとあり
まりとてとすれハうりかくすれハ
あるひきてすあふさきゝるさま
たりしられ やさしきこゝろ
ゐあるるとはなり
むこすゝ むとへなり
たをれ 風流な狂なりけり

三 万ふいうしくともゝこれもま
さりん男ハいとさうく窓の玉
此庵此底(さうき)のかのんちゝすゝき。
露霜に志ほれて所さゝ
めすゝなひありききかの秋のいさあ
世ハ心そしつとをとつむりかん乃
いと悔すくおふさきゝろさふさ
ひそかれさるハ独ねくちにまと

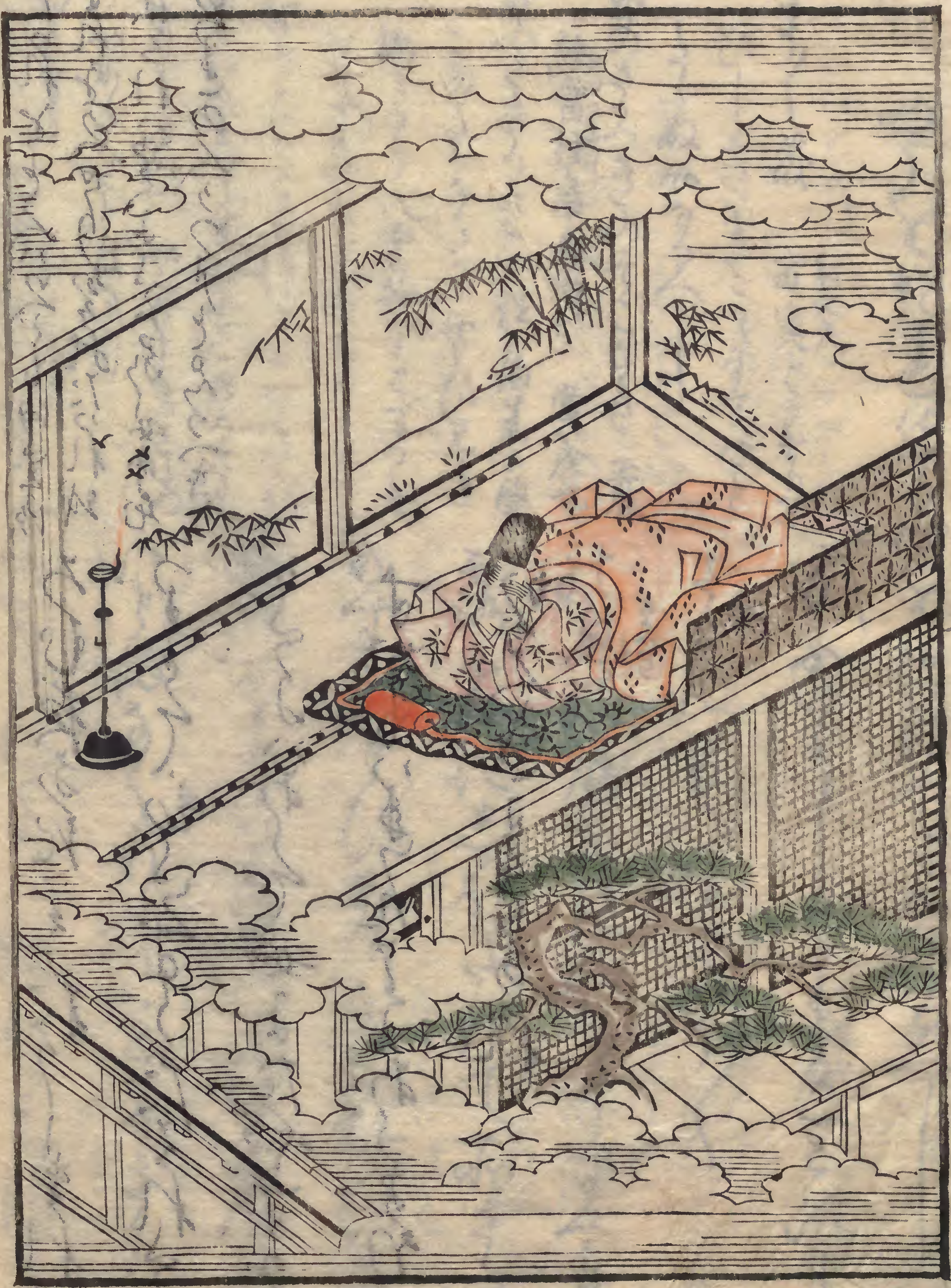


たかれとも人ハのへも油こそ流
これをうへせりあやれたかれ球
秋くれハ秋へよしふ人ハ女郎花
いまこの人ハうつりともるへき

ろむ夜ふ纪てろおりし書れさ
つまとそ心ふこすうたされさう
こゝろふハあそて女またやすのう
すおもいまゝんたうぱおつまわ
かゝへきこときさるゝれ

第三段

君子に三のいましめありわかき時は色にあり
と文宣王ものし給へりる此時女を小姫けるとき
らふ事ハ唐我朝のあとさきをためしなりと
今ハ其の子にいたるまで男ハ金のさゝつきの座
なをさらにうつへてかけるは人のふしんあるへき儀
るまじきもあり兼好のあやうしき他をなすまじか
やうみまり悪縁をはじめてのち後よく御ゆめあらん
むしありよりきたへて良醫の霊薬をのません
とてかくさたとさへのまうけもかぶとし
あひせ給ひ人ハこゝろのなすの南
地のわかれも覚えりそしる



此段ハじゆうをとりいそくあるべし

四「後乃世のこと心にわすれず佛の道うとからぬ心にくし

後の世の事 此段ハ發心を勧む
源氏のかの大むねにかなひ
合へし 前の三段ニ世の中のあ
らまほしき事をいひて
このたんより後世ようのこ
とはまことなるへし

第四段

佛道修行とするやからハ此一部も手にふれし
此段によりてしるへきことハものものからく
かきかへすへし深き心あるへし楽多心鈍とても
ふかき人ハ後世を願ひかねりのかたりかきも
の此世をうれしむゆへよりて信をさつ御座り
その悪癡貪ゆへの道の心に似つかぬ人は
をかしくて富貴の人ハたのしき事まつをと
すまとも珠数をは人にかくしもちてやたる
事を仏法よと侍さうらし末法の風情なりさ
候よりて拝んたまひかくて此第にハ名の佛
くさ紀事をまもりとて人のよきもきさし

事を习学して又一向に加へ也もやいならぬゑ
いのちもすこしかくれしと見ゆる西行の時
ふなまて出て世をいとふ人も物詣のうちし此善好
の法ハ後世を祈りふこのやうなるまねよ成
しるべとも見えたりあさましき事なり

不幸 さいはいうく時よおもへねんなる人

五ふ 不幸に愁ふる人のかへ

ありうやしき美し られしとかへりふ物ひ
まいるもうく 世ふかるむ
ふるすかきしおとねかも つきるおもおもておかのな
のはまつすわり
さうかくよおしまり きうのふ門さしこめて往ても
やさしきうてふおうきし
きさすり

顕基中納言 西宮左大臣 すくめしぐもしうさうかう

高明公の孫大納言俊賢卿の一男也

流罪左遷の人なれは配所と示すなり

ほあらまほし。顕基の中納言の

いひけん。配所の月つみなくて見

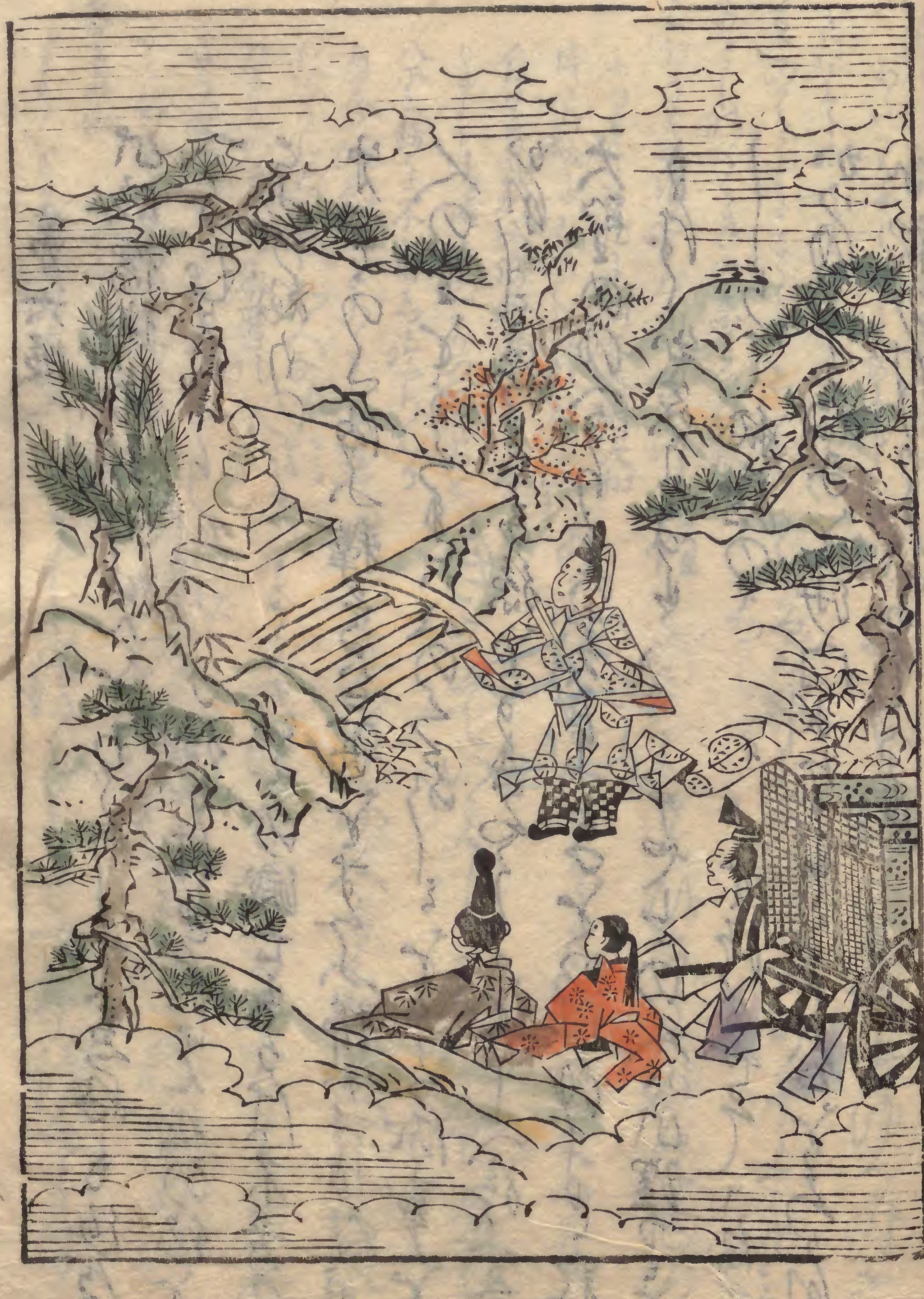
むこともさもおぼえぬべし

第五段

世捨人のさうは打れしやうなれども心ある
と心なきと大ふかはりあり不幸ふ
ましへ志儀そてとかけるは不遇ふ恩愛乃
妻子のあわれみて主君にとられ世とも
なり入婦にも打りひきかうつるにどつりとすり
の世りはかやうの道世をと雅俗の事ともに慈
好の友によりめておゐは毎のしき世のつとひやう
を何しろは心あらきまのとれ業門より此かくり
めとへふきうやむきもんよ顕基の黄門の金言
をあるたかりもしと見ててもより此段ハ心ある人
ハよく〳〵心を付てよく見るへきものや

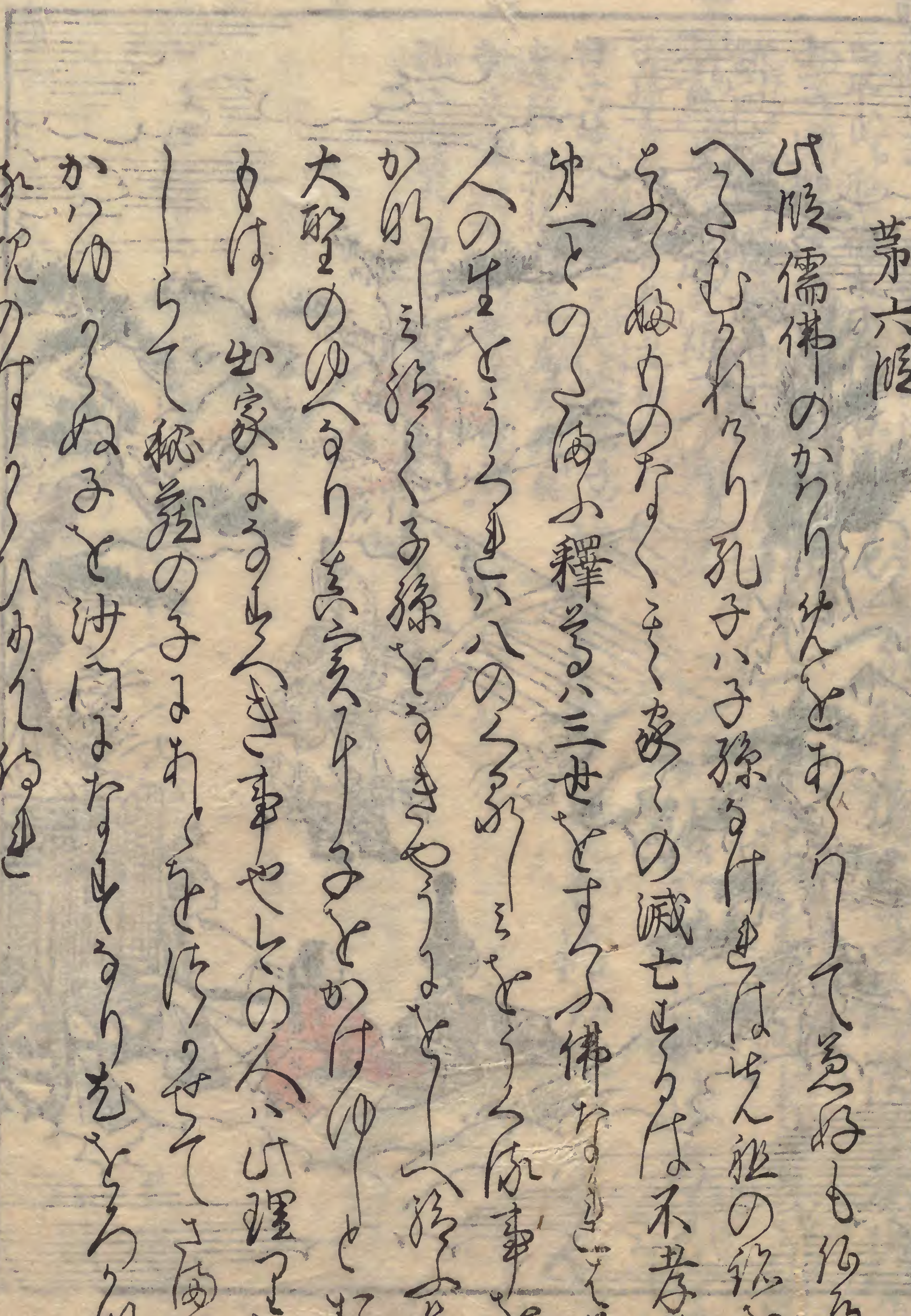
六　我身乃やんことなからんにも
まして数ならさらんにも子
といふものなくてありなん。前
中書王。九條太政大臣。花園左大
臣。みなぞくたえん事を願ひ給
へり。染殿のおとゞも。子孫(しそん)
おはせぬぞよく侍る。末のおくれ
給へるはわろき事なり
とぞ。世継の翁の物語には

前中書王　中務兼明ノ親王
延喜の御子也詩文能書の
人なり
九條太政大臣　伊通(これみち)公也
花園左大臣　有仁(ありひと)公也後三
条院孫輔仁親王の御子之
そう　曽の字也子孫を以曽
重也自曽祖至無窮(きはまりなき)皆得
称曽孫ト
染殿のおとゝ　太政大臣良
房(よしふさ)ハ忠仁公染殿のきさ
きの父清和天皇の外祖父
也
世継の翁の物語　一ニ大鏡と
おつく藤原為業法名寂超(じやくてう)
作也文徳天皇より後一条ノ
院まで十四代百七十六年
帝王大臣の事をしるせり



聖徳太子　用明天皇ノ御子
也平氏カ聖徳太子傳暦曰昊
子三回リ御陵ヲ勅シテ墓工ニ曰ク此
斷四路朕カ意趣有リ二ツ一者為
令メン無カラ太子行道之類ニ二者我カ
子孫為メ令シメン無カラ日本ノ之相續又
曰子孫不續豈不云大咎孔子ノ
遺教ニ無キ後嗣者為不孝矣
吾為釋迦大聖ノ弟子豈為
孔子小賢ノ弟子ト云云

いにしへ聖徳太子乃御墓所を
掘てつのせ給ひしもことゝき
道をしく絶たて子孫あらせし
とおりよりとおもふよりや



第六段

此段儒佛のかはりめをあらはして兼好も儒
へだてられたり孔子ハ子孫なりければ此段の孫を
ちかひめのなくてこゝろゑの滅亡あれは不孝の
第一とのたまふ釋尊ハ三世をすくふ佛なれはこそ此
人の生をうくるハ八のくるしミをうくる凡事と
かれたる子孫をうきやうにともへ孫ハ是
大聖のゆへをり兼好ハ子をかけゆるとれ
まはす出家ハすゝむへき事やしとの人ハ此理をと
しらて秘藏の子にわかれてはてをそしらるゝ
かのかつねの子を沙門になしてすりむとそられ
御覧のはするしひめもなし侍也

あたし野　名所也。のちまても七
あたし野心こゝろにかなしきものをいふ
されともとゝまるへきものハあらさるにたとへ
其のことくにはかなき事ハ露のことし
あたしの露ときえの来くる事秋風に
こほるゝ露や玉川の川
ふるき歌枕に阿太志野大和
或ハ山城にありと後撰玉川は
合せり玉川又は阿の名所とも知
るし　清輔名所不審なるのせたるを
八雲御抄子不審志玉ハあり
名合は判詞にあたし乃名
たくらねまや知人おしみ化
野とかきり永暦は名合に
さう地をすかさてあたしのま
てもきんもおもふさかし
鳥部山　おたきの峯ともいへその
ほとりをとりへの山という

あたし野の露きゆる時なく
鳥部山の烟たちさらでのみ
住はつるならひならは物の
あはれもなからん世ハ定めなき
こそいみしけれ命あるものを
みるに人はかり久しきハ
なしかけろふの夕をまち夏
の蟬の春秋をしらぬもあるそ
かしつく〳〵と一年をくらす

すひ夕をまつありさまもおほくやま
そてはかなきものにたとへにひかれきか
けろふ　遊絲(ユウシ)蜉(フ)蝣(ユウ)蜻(セイ)蛉(レイ)野(ヤ)
馬(ハ)陽焔(ヤウエン)これらをかけろふといふや
よむなり夕をまちけるといふ
事もあり
夏の蝉のはるあきをしらぬとは
あまりすくなき命をいはんとて
なつのせみ也　荘子希逸(キイツ)口義(クギ)に
蟪蛄(ケイコ)寒蝉(カンセン)也春生夏死夏生
秋死不見四時之全(マツタキ)を
こよなう　八わかちに事なるといふ
ありし河海に無越閑雅とも
あかずとかきたり　もとは忘也
ぬるまくれは　荘子　多(オホキ)
男子則多懼富則多事
壽則多是三者非所以養(ヤシナフ)
徳也

たにもこよなうのどけしや
あかずおしと思はゞ千年をすぐす
とも一夜の夢の心ちこそせめ住
みはてぬ世にみにくき姿を待え
て何かはせん。命ながければ辱(はぢ)
おほし。ながくとも四十(よそぢ)にたらぬほ
どにてしなんこそめやすかるべき
れ。そのほどすぎぬればかたちをはぢ
る心もなく人にいでまじらはん

夕の日に子孫を愛して
朝露(ノ)貪(ムサボリ)名利(ニ)夕陽(ニ)憂(ウレフ)子孫(ヲ)
さかりさかゆく末を見んとなり
いまひとつあれとれもむかしハ
さかゆくときもありしものを
世をむさぼる心のふかく
論語(ニ)及(ンテ)其(ノ)老也血氣既衰(テ)戒(ルコト)
之在(リ)得(ルニ)　又曰老而不死是
為(ス)賊(ト)

事をおもひ夕の日に子孫を
愛してさかゆく末を見ん
までの命をあらましひたすら
世をむさぼる心のみふかく
物のあはれもしらずなりゆくなん
あさましき

第七段

生とあるものとて死をまぬかるゝハ世のならひなれとも
或ハ松竹にたくへ鶴亀とうたはれし人
も終のひとつ年をつくさすめしもなかしとせ
儒道にハ老て死せさるをはあれ賊とする也とい
ましめ仏法にハ寂滅為楽と見えて生まれしも
僧も俗も此理りにはもれぬゆへに不老仙の術のたと
まうぬもとかへつらくによかれ給ふ松長弾
正久秀ハかくれなき武勇の名将なりしか共
老たるにをとしへやまひにかゝりてならぬとへハらゝ天の
わけうといひて足をとめずしておかうかうに
なりけるかさかゝむかしそれいつき天のあらし

しておくべき事なりやといはれければ上人より此道理
をわりへのて身命(しんめい)をも捨むハ愚癡(ぐち)と濁病(たくびやう)との名
されバまことのまよりむなしき事や此眼を
ゆゑてハそれもあるべしむつき彼まで待なば

世の人乃　礼記ニ飲食男女ハ人之大欲存焉　文選聲耳姦色ハ易惑ス　白氏文集ニ古塚狐妖且老化為婦人顔色好見者十人ニ八九ハ迷假色ノ迷猶若是真色ノ迷人ヲ應過此彼真此假俱ニ迷ヘ云云

世乃人ハ心をまよハす事色欲(しきよく)
まよハすべての心ハどうかわすな
をそれ自ひすとハかりのとも
衣裳(いしやう)よたき地
まと志りなすの一寒うに思白
ひるそ必心ときめきさする地

えらぬ　えもいそれぬなりき
よわひ　八雲よ抄あるゆ
うへかゝしまり
むとききめきき　枕草子よむとき
めきすうぬよきたきぬた

きてひからりしきこゆとあり

久米仙人　元亨釈書ニ久米仙ハ和州上郡ノ人入テ深山ニ学仙法ヲ食松葉ヲ服薜茘ヲ一旦騰空ニ飛過故里ヲ會婦人以足踏浣衣ヲ其脛甚白忽生染心ヲ即時ニ墜落ス替ニ日ク昔婦女ノ誓言ニ曰ク我不降一角仙ノ頭ニ不出山ヲ果シテ然リ久米見白脛而墜有以矣哉於戯色之惑人也可不慎乎

久米(くめ)の仙人乃地あらふ女乃
はぎまれ志ろきを見て通力(つうりき)
うしなひたまへり海しらむあ
しろくへすそのきはこに肥(こえ)
あふづきさんハかの名みて
ねんさもありけり

かの文　かよりつくろひたき
つくらいろすゝねと以るき

第八段

此段ハ義の人ありて猶おもひまとふて東坡か山桐の詩をとりあはすへきものなり

九

女ハかミ　文選衛后興於鬒髮飛燕寵於躰輕　詩君子偕老篇鬒髮如雲不屑髢也

けはひ　氣化字とよめり又形勢とも景氣とも書り

うちある　常住体の義なり

たゞあるさま成なり

いもねず　ねもねずなり

君こふるさまこそみゆるよその

みるけしきもいとねられず

女ハ髪のめでたからんこそ人の目たつべかめれ。人のほど心ばへなどは、ものいひたるけはひにこそ物こしにもしらるれ。ことにふれて、うちあるさまにも人の心をまどはし、すべて女のうちとけたる

海ゆへもあかねさまも
悟みむすへもあかねさまも
まうんすんすれたいるを
せあつゆへなり　恩愛執着之
愛着はうち
六欲　眼耳鼻舌身意と六
根とし色聲香味觸法を
六塵とはいふこと
樂欲　けうらくとよむへし
ねかひもとむるへし
猒離しつへし　いとひさるへ
しとなり
みまとひ　色欲とはいて
いろをのみ思ひ山海の志けれハ
へとりめつんへまよふらん
女のことから　女のかまて
大舩をつなくと云事梵綱
経にありとなん

いもねず。我終わしともせひ
さて濁。ゆへともあかねさ
おもふしたへぬみハたてあるを
せあつゆへなり。凍ふ愛着(あいぢやく)の所(ところ)
を根(ね)かく源(みなもと)とをし。六塵(ぢん)ハ
樂欲(げうよく)おかしとふへとも。みな猒離(えんり)
志つへしとを中またりれさんとひ
の心まつやめ何てきのことり老さ
派もわりなきも智あるもとる

女のさけりあした　美女ある
ひハ危ある悪女のあしたま
て修めまとハ害なりも多く
廉のよろ事必定なりと
おろへやき
ミつゝいましめて　自警と
朱文公自警ノ詩ニ十年
浮キ海ニ一身輕シ帰テ對シテ梨渦ニ却テ有
情世上無シ如キハ人欲ノ險キ幾人到テ
此ニ誤ツ平生ヲ

うするも心かろ不あしとへんゆゑ。
されも女の髪すちとよれる綱(つな)
よハ大象(ぞう)もよくつなかれ女のえ
まるあしこすて修める笛(ふえ)ハ。
秋の鹿必よるとそいひつたへ
待つこの心ハ常しめておそ
るへく慎しむへきハ此まよひ
なり

第九段

只此まよひの一心のことはりをしるに此跡(あと)こそ
あるれ人々よろつまて女ならハ三世の諸佛(しよぶつ)も世を
出のふへからと男ならりまても世ハわたりかたし
へしなと云人あまたされハおろかなり女あるゆ
よりて人さねつき須人種(たね)はさねよりて三世
の諸仏もねのかしかれ人々と云拖たくてなり
せは佛もおろへからと三千世界(せかい)と云も衆生(しゆじやう)有
ゆへなる鳥の巣(す)ありかとへよりなるなきゆへの
巣もなし衆生なき所には世界もあるべからず
もそれにそ寂光(じやくくわう)の浄土なるべきとむかし此女を
ひとめれおりて柁ところよりとかけおのれ

もろこしむかしに女ハちぎりのとこひとつもおなじて
ハ菩薩のごとく心ハ夜叉に似たるとこそいひて
られし抱きれをおもへどもハかなきたのしき山脂
乃いましめんむ孫膳にそそ侍き

弟ハ世話ニつきれのきやうにも　さもありぬつき
たくひ
り此方より　逆旅　寄寓

家居のつき　十
しきしく　しきてうがりのやどりとハせる　あしくまい
真あり抱きれぱよきん乃ぱや
京にありしるふハざしへさる月の名も一きハ志
こくと見へゆうそうしぱい西めしくきらかな
らねとぱ本もち抱かりてぱゆきれてすらね海遊此宮

いまめかしくきらくつのかね
うたりしくらきさてそうへら
まへおくろねもものと云事ヽ
こよきとすゞね　とうつくろいね
そのまつの称さ
をいい　すいつきし　遠垣と
かう
調家　よる所の道具を云之
あそくのたくるさ花に云とつうし
いゑを花靭に作るとを云
うのやまとの　かう　抱月の器
れいうくの器とをふし
せんさいの草木まくそんぶかく
まらす　枝をとため桑をす
うつくろひそへろ称
さそもやいふのへすむときの時の
まれかかりともうりやん
すうとおろしとる迷も

もんおうね海によされにすいかる
たきりおりしくぽうちおろ調家
もむりしおかくてやいとてつうおう
こうぱまうしとせんゆれ。おかく
れそさればとつけてぷのき
たくぷかく　れやまとれめつしく
えすうね調家ともなくへをきこ。
前栽乃草木まてん乃まし不
らすつくりするせつのがんつゆもく

おもむきをみるべし
あさましからぬかりそめことも心をも
しらしられ　これらをも
まひてむもおもはすれと
なり
後徳大寺　実定公也　井蛙抄ニ
徳大寺にその間にまゐりたるところ
あり寝殿の西の角の方に
ところで西行に對面せられ
きりつとし
西行　俗名ハ佐藤兵衛尉憲清
御九代嫡孫鳥羽院の北面也

苦しくいとわびし。さてもやは
ながらへすむべき。又時の間の
けぶりともなりなんとぞうちみる
よりおもはるゝ。大かたは家居にこそ
ことざまはをしはからるれ。後徳
大寺の大臣の寝殿に鳶ゐさせじ
とてなはをはられたりけるを西
行が見て鳶のゐたらんは何かは
くるしかるべき。此殿の御心さ

ばかりにこそとて。其後はまいらざりけると聞
侍るに。綾の小路宮のおはします小坂殿のむ
あやの小路の宮
ねにいつぞやなはをひかれ
たりしかば。かのためしおもひ出られ侍りしに。誠や
からすのむれゐて池の蛙をとりければ
御覧じかなしませ給ひてなんと人のかた
りしこそ。さてはいみじく
こそと覚えしか。徳大寺にも
いかなるゆへか侍りけん

徳大寺にも　西行がそしりつるぞ
ことしからぬとたゞまで
まつ殊勝のよし

第十段

此段のこゝろは家居にて人の心もしらるゝよしハ
家作りをもあしくはすれどもいやしからねバ畢竟
かりのやどりなるものハたゞやすらかなるをよしと
いふ事なり此事人の身の肝要なれバこそ居無
求安とみえしかば論語に三所まで孔子のの給
ふところ

栗栖野　山城國醍醐の近辺
さし秋のころは小野の萩の花
ちらすん時よりてたむけん

十一

神無月のころくるす野といふ
所をすぎてある山里に尋入る事
侍りしにはるかなる苔の細道
をふみわけて心ぼそく住なしたる庵あり。木の

筧ふかうつたひけひの雫おちてハ露ぞとゝまる
あかたな 閼伽ハ水の梵語也 阿伽とも書之
とみおし。あかだな棚に菊紅葉など
とおちしらうぢすのに住人のあれハ成べし。
てもあられけるよと哀にみえるやとよ。かなたの庭
にあかさなる柑子の木の枝もたはゝになりたる
えるもたりくは むすし 枝のたえ
かこひりときびしくかこひさ
あるまでみえそおちる三ぬへき仏勢 えさしたりくまとけの白露
せしこそかことさめてしはれ
おりはしかりしと覚えしか

第十一段

此段ハおつしおとまも何を頼りことをまてもあれ
思ひきりて世を捨るほどの人のすてしの利
害のこゝろさしのこさるハおやまりなりと志ゝ
しゆんこう寺やしなすりむ寺のよ傍の如切如磋
如琢如磨しても此事ぬべし

注
同じしんなるもん人とあやうに抱しておかしき
うらうて
底とのこまる弟子や　表裡もまさに心
事も世のちかすき事も。
うしろへいひすくさかんへうきついかる人ぞおそれ。
歎くらいたらん
かれむのふかんの心ぬまるよ　おもた
さる人おりて悔しくはれ歎たか

志ある弟子なるべし
はまれたとむかしひのまつかんは猶
おつ心ちやせん。たりひよいへ
むかしの事をは実ときく
くひおり抱しうびさしくたりふ和もおもんへ我
はさやハ志ふ子とおもそひよふみざりうさうとも
おりそりくつましくすくさかめとおりへと悲しみの
すうしかくらう　とやくやとか
心ひおも弟子さされ尤公遊
此こられ衣まてへるまきし
これとおもしりくさらん
おりみ事いふてうさてよやとめき
まれしおもしきへ下あ此事へ
かめこ川なりもまれとおもし
くさるん人のぞ。たるこのように子
しとといへんかとこそおさめ。

なくのよしあしも由来
らなきむなしき事
をいひつゝし真実心
底のすくいなしとや

まめやかに人の友とたのむに
たよるべき人のありぬべきさうし
見しきや

第十二段

此段ハかの在原の中将の[illegible]といひて出よ
まやのうちの心よりもなつかしくよりかれ
つらとおもひける沢の段をかゝむこゝろんの筆
法なるべし

ともし火のもと　韓退之

符讀書城南詩曰

時秋積雨霽　新涼入郊墟

燈火稍可親　簡編可巻舒

見ぬせの人を友とする　迂叟

平日讀書上師聖人下友群賢仁傑日黄巻中方與聖賢對何暇偶俗吏語耶

こゝろうるへし　無趣とみゆこゆ

十三

ひとりともし火乃もとにふ
みをひろけて見ぬ世の人を
友とするぞこよ
なうなぐさむわざなる
文ハ文選のあはれなる巻々
白氏文集老子のことば南華
の篇

まゝすこし八巻あるよみたる
といふ事なり

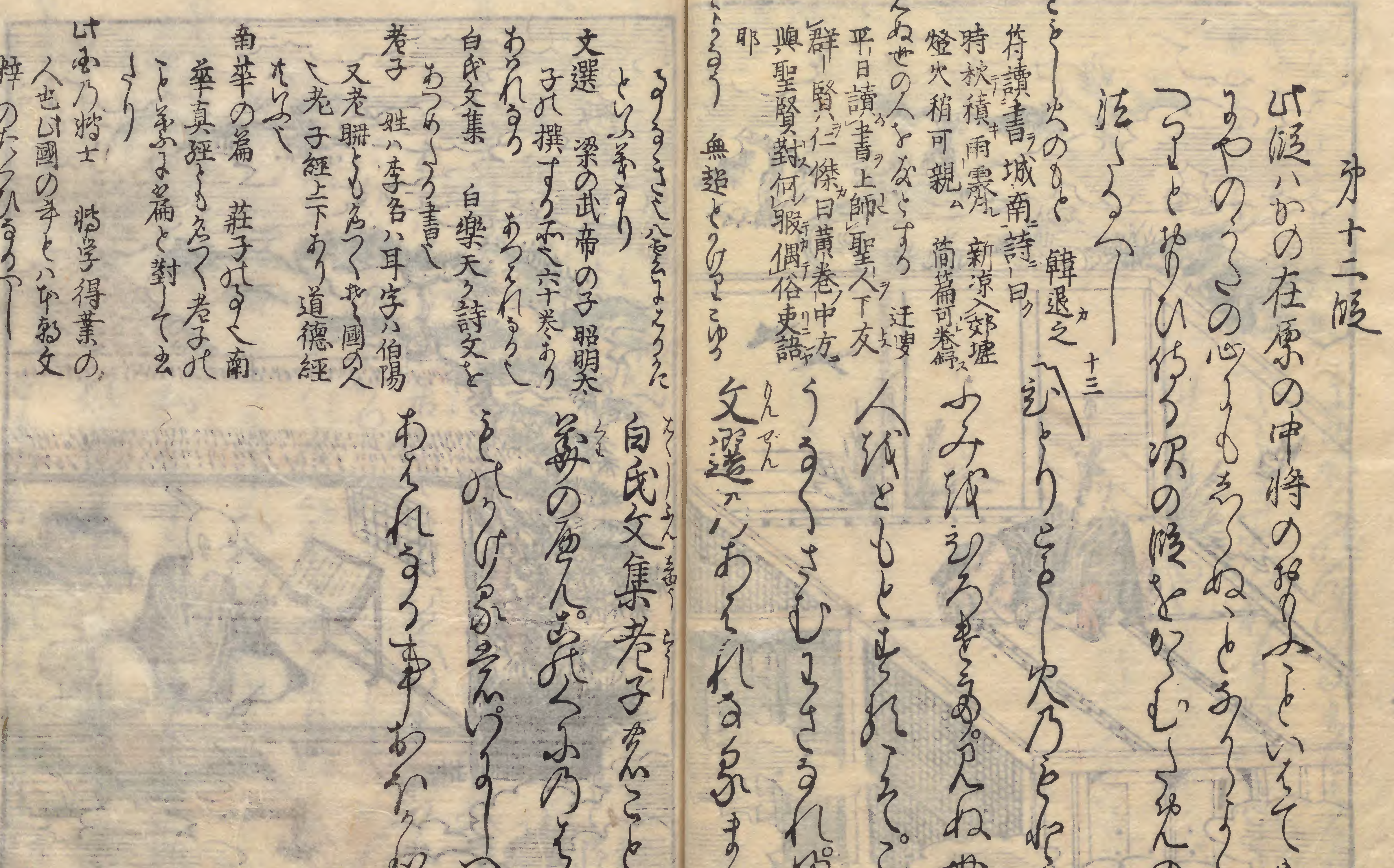
文選　梁の武帝の子昭明太子の撰する所也六十巻あり
あはれなる巻々　あはれなるべし

白氏文集　白楽天が詩文をあつめたる書也

老子　姓ハ李名ハ耳字ハ伯陽又老聃とも云周の國の人也老子経上下あり道徳経といふ

南華の篇　荘子が著す南華真経とも云老子がことをのべし篇と對して出せり

此國乃博士　博学得業の人也此國の手とハ和朝の文粋のたぐひなるべし



第十三段

此段は儒書と内典とはおほせ文選と荘老の書とのせられたるハ兼好の心によりし給たるなるへけれ孔子にもわろくこれ此事の心をおもふハせり閑居なとあのむ人のまれい人にはむにあひ侍るをかやうの事をえてハおもし眼力をとむるしく流れてそのふり学者のことめにハよむ人ののうとやいへきかや

たかうし文選ハ前段の文選老子にあはりて半より なりおかしきハおとしろさく

和歌のうたおかしき哉な れおやしこれ志川山々川の志をさもいひ出れしおもしろくた

たそろしき哉 寂蓮法師 いひけるハ此のやうよいて

しきたのかしらのもて
ふかいふたそろしきこゝの
ともかそぬの床ふとひ
つきハやさしきし侍て
やさしきこゝのとおそろ
しくいひなすなと下の
ますし

貫之　孝光天皇の孫まへ
名阿古久曽
糸によする　あつまへまかりける
時みちにてよめる
いとによるものならなくにわかれ路の
こゝろほそくもおもほゆる哉

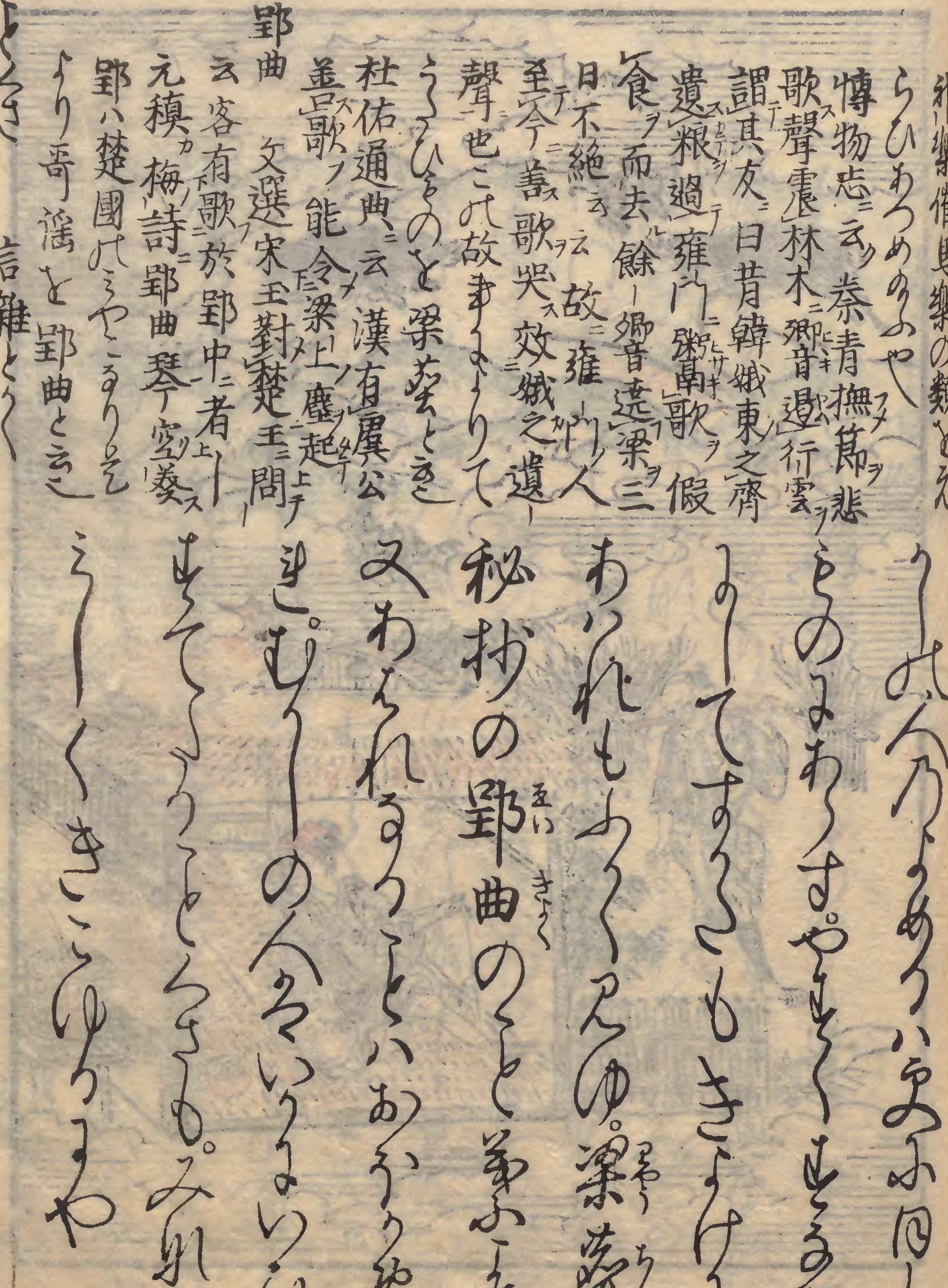
そろしき猪もふす猪の床と
いへハやさしく成ぬ。此段の言
ハおそろしくいひなすなり
とかくゆうハおもしろくやさしき言の
ものやうにいふうや言葉
のかよわされまきし紀貫之
ハかし貫之か糸による物な
らなくにといへるハ古今集
の中此言のくつとかやいひつたへ

さえとハ哥よ　源氏総角ニ
我かみさとハむすよめゆるん
とおもすし給つゝもいせのこ
もかりこゝそハわりきあとお
りうちゆうもうらのふ
笑ありかなよきしいるさま
りんもつまし。そて物とハ
あかまとしつゆきさらけ世ふ
うれおかしとてうよ心かかき
すらよ引きかきろんとおを
きふかこととろ人の心をのかう
たなりすりきうとおもひ出
の歌
のこる松さへ　旅部成中の道
冬のきて山もあらハに木の葉ふり

されと今此よの人のよみぬへ
きことからとハ見えす。其世
の歌にハすかた詞此類のみ
おほし。此歌にかきりてかく
いひたてられたるもしりかた
し。源氏の物語にハ物とハ
なしにとそかける。新古今
にハ残る松さへ峰にさひしき
といへる歌をそいふなるハ猶こ

のうち松さへ二つのふさひしき
家長 高明公の十代の孫後
鳥羽院の時代わか所乃開(カイ)
闔(カウ)よりし人也系圖未詳
云のこゝち 八雲抄に兩行か
美にも後の人にきもおとらぬ
りにさりけれりり末代
に残るへきとこそ見えけり
いはや 不知と事ありいはよ
ようひぬと云事を公ゆり
まとあり
うら陰ら 花あるに此花と
いふ名不の事とあつめたるを
いそり抜國法師ある代々
此花ありてまて八詞の
つき花詞ぬへし
梁塵秘抄 後鳥羽院御
作也

ともかくもけふ姿をもや
見ゆらんされとも此も流祇(ぎ)
判(はん)のはよろつきよしさる
ありて後にも拾文よかんし
係下されてるよし家長か
日記にありたり。此れみちのこ
いふしてよかりぬおとし事
もおもしとやいまもよみ
あへ見あもし詞(ことば)の花も。む



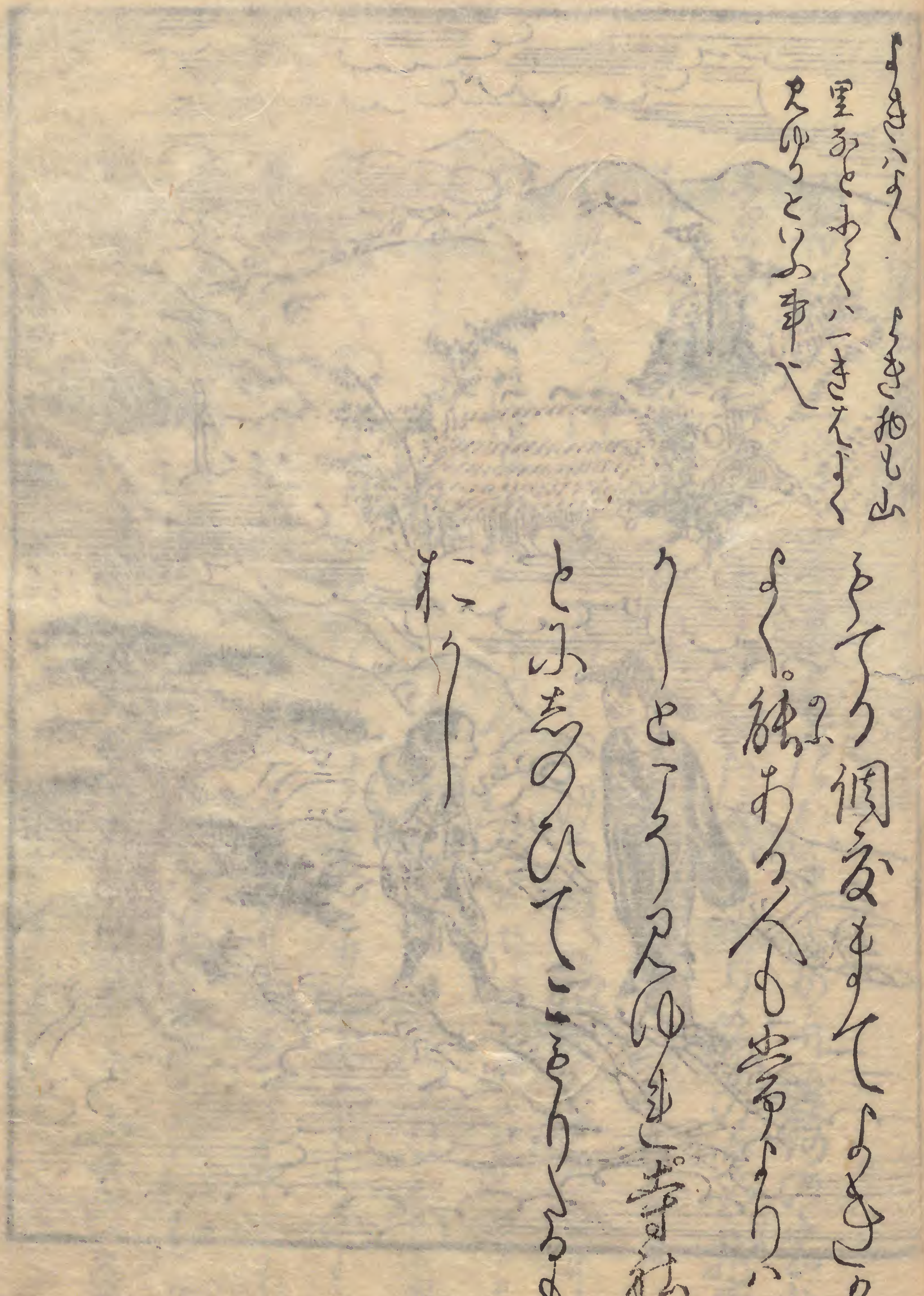
神楽催馬楽の類とえ
らひあつめたるや
博物志ニ云ク秦青撫節(フシヲ)悲
歌聲震林木ニ響遏行雲ヲ
謂其友ニ曰昔韓娥東之齊ニ
遺糧過雍門ニ鬻(ヒサキ)歌ヲ假
食ヲ而去ル餘響遶梁ヲ三
日不絶ト云 故ニ雍門ノ人
至今ニ善歌哭ス效娥之遺
聲也 これ故事よりて
うたひものを梁塵とき
杜佑通典ニ云 漢有虞公
善歌フ能令梁上ノ塵起ト
郢曲 文選宋玉對楚王ニ問
云 客有歌於郢中ニ者ト
元稹カ梅詩ニ郢曲琴空奏ス
郢ハ楚國のみやこなりさ
より哥謡を郢曲と云こ
とくさ 言雑とく

うれへのあつハ空ふ因し
ちのよわつすやとくもるか
よしてすうさもきよけふ
あいれもあくつ見ゆ。梁塵(りやうぢん)
秘抄の郢曲(えいきよく)のこと葉ふそ。
又われらるうことハおかうちゑん
きむりしの人ぞいうまいひ
まそてうことくさもみれい
うしくきこゆるや

第十四段

和哥こそしう浅おりしたものなれと出世
家は家をふもとゝしてけつろうき道なれと
もろ人かれはぬる事もわり和哥は
御門ゟしもしもなり公家武家沙門児若衆
女童下々のいやしき雑人までもにおもしろき事
なりされば此国の風俗なりければ御へし　其代ゟ
頓阿兼好浄弁慶運これを和哥の四天王と
いわれし人なりいふ智者なりしも此道は不
堪の人なれば此草紙もかゝるべき御座さしく於
ゐられ侍るまじ此兼好法師の時代のうち
さればとてもその世にあふ人まじれるべし

いつしへのかゝくねにのはしれ来来記ハ廿こと
なりひらやうに成ゆくてそおさ御しく侍
き
十五 いつくのもあれ志りし旅立たつてそめたりむかし心
ちぬれぬるもきかりこてかりしこりんおりきぬ為ふち
ひさらふ山里なれとはいとめられね事のこゝ
おふかる部へまとかるまとめて文やるゝに事の
便宜にまつるかなれといひやりてこそれし来れ
さやし此ふかまでしてそ方よころつりひせられ



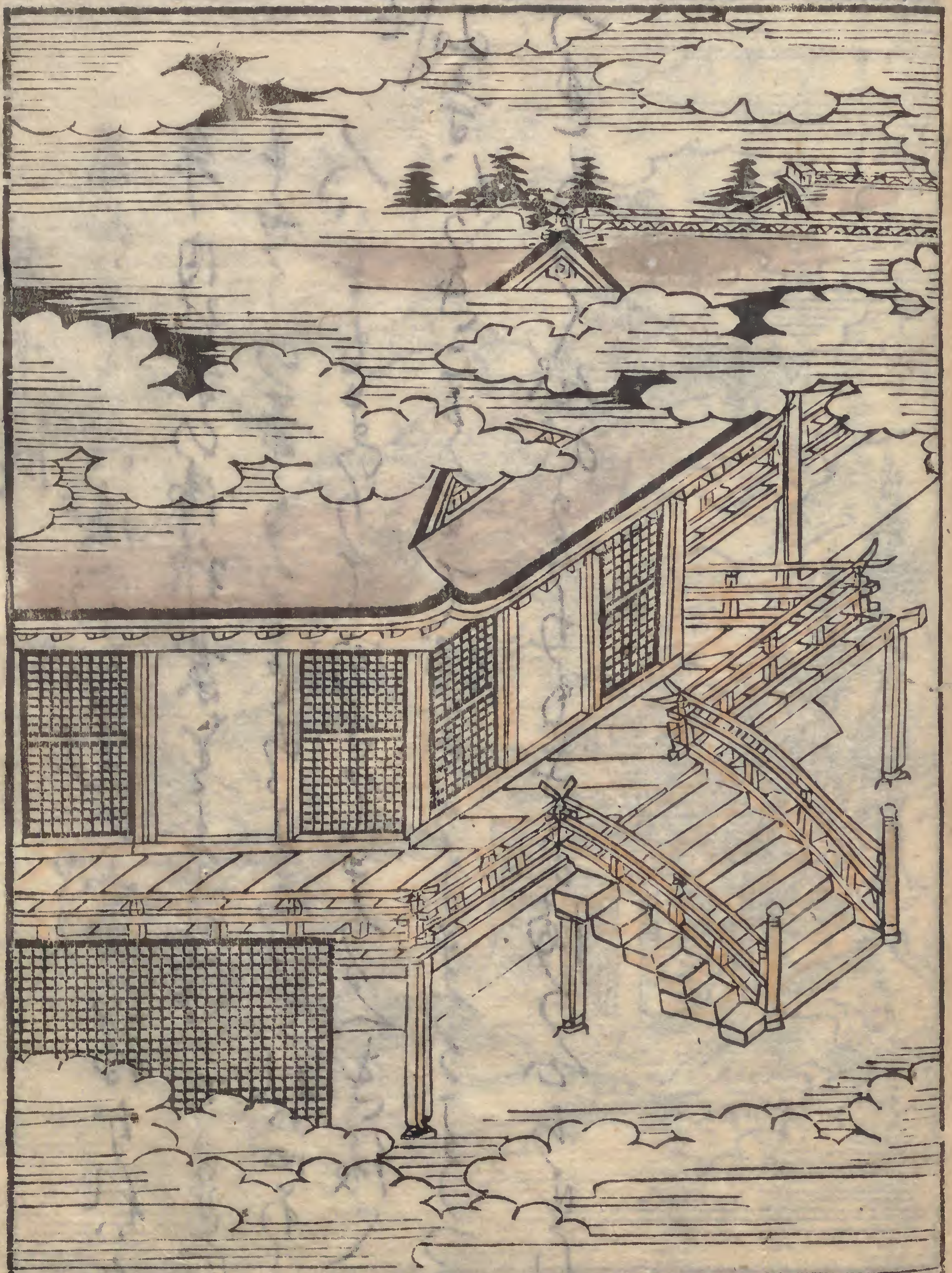
よきハよく　よき袖も山
里ふとふくハ一きえてよ
たゆるとりふ事で

とてり個家までしてよき色
よくの餘あの人も常よりハお
りしとてりんゆ生し寺社ふ
と小志のひてこもりるも
松りし

内閣文庫

第十五段

羇旅の二字ハいづれもたびといふ事なり羇の字ハ遠国へ日をさしてゆくたびなり旅の字ハ我宿を出てちかきかたへゆくたびをもいふなりとぞ此段の心は旅ころもとかけるは旅の字の心なり相なるすみかはなれ字ハはなひとをさせしとせのことわざともやめるまでけふもと覚えて行り人の氣のはく也なり歌のこゝろはさのまゝやすくきこへけるなりのちハ為家卿ともまたそともしくの人きく人此上をとかくもおもはじむ心なくなさけすきものなりたびといふ字ハ義まつ方とかくとおもふ人此かゝるべし



十六

かくらうるはめつらしくおも
しろくおかしきもの笛は
ひちりき篳篥つまよきてたき
琵琶(ひさ) 和琴(こえ)

神楽 天照太神天の岩戸をさしてこもり給ひし時天下くらやみとなりければ八百万神いのりまうさんがため天細目命(アメノウズメノミコト)かぐらをはじめ給ひとうらうとしてうたひまひ庭燎(ニハビ)をたきしよりことはじまり亦内侍所の御神楽ハ一條院の御時よりはじまると

和琴 あづまごともいふ神代より六弦をそなへて…と後に琴よりて六絃となして弾ずる日本絃の楽器(ガクキ)のはじめなり

第十六段

兼好ハ若き時後宇多院の北面のはなれハ毎年内侍所の御神楽をとそ聴ゆせさせけめまかせうの事なうまとおほきゆせされハ心おもむ人ハともまいりて聞ゆてまうくき候し

十七

山寺にりきこもりて仏につかうまつるこそつれづれもなくこころのにごりもきよまる心ちすれ

第十七段

寺に参籠するくらゐはいつくもおなし事なれとも山寺とかけるに付て一しほさひしく心もきよくすむるを待つさまなれは比叡山なとの事なるへし

つゝまやか　約の字也倹約をまもること

十八

人はをのれをつゝまやかにし。おこりを退けて財をもたす。世をむさほらさらんそいみしかるへき昔より賢人の富るは稀なり。もろこしに許由と

かしこき人のとめるハまれなり　孟子為富不仁矣為仁不富矣　伯夷　叔斉　顔回　閔子騫　原憲　子夏　南華老人　五柳先生　浣花翁　陳後山なとの賢人まつしくていやしきたくひおほかり

許由　堯天下をゆつらんとのたまひけれとも受すしてその事荘子にみえたり
高士傳ニ許由隠箕山ニ峯ツ捧水飲之遺人一瓢得テ以テ取飲ヽ訖掛於樹上ニ風吹テ歴ヽトメ作聲尚以テ為煩遂去之

なりひさこ　和名集ニ云瓢奈利比佐古斟水器也

いかはかり　心のうちすゝしかりけん
心のうちきよくいさきよかりけんと

いひつる人はさらに身にしたかへるたくはへもなくて水をも手してさゝけて飲けるを見て。なりひさこといふものを人のえさせたりけれは或時木の枝にかけたりけるか風に吹れてなりけるをかしかましとて捨つ又手にむすひてそ水も飲けるいかはかり心のうち

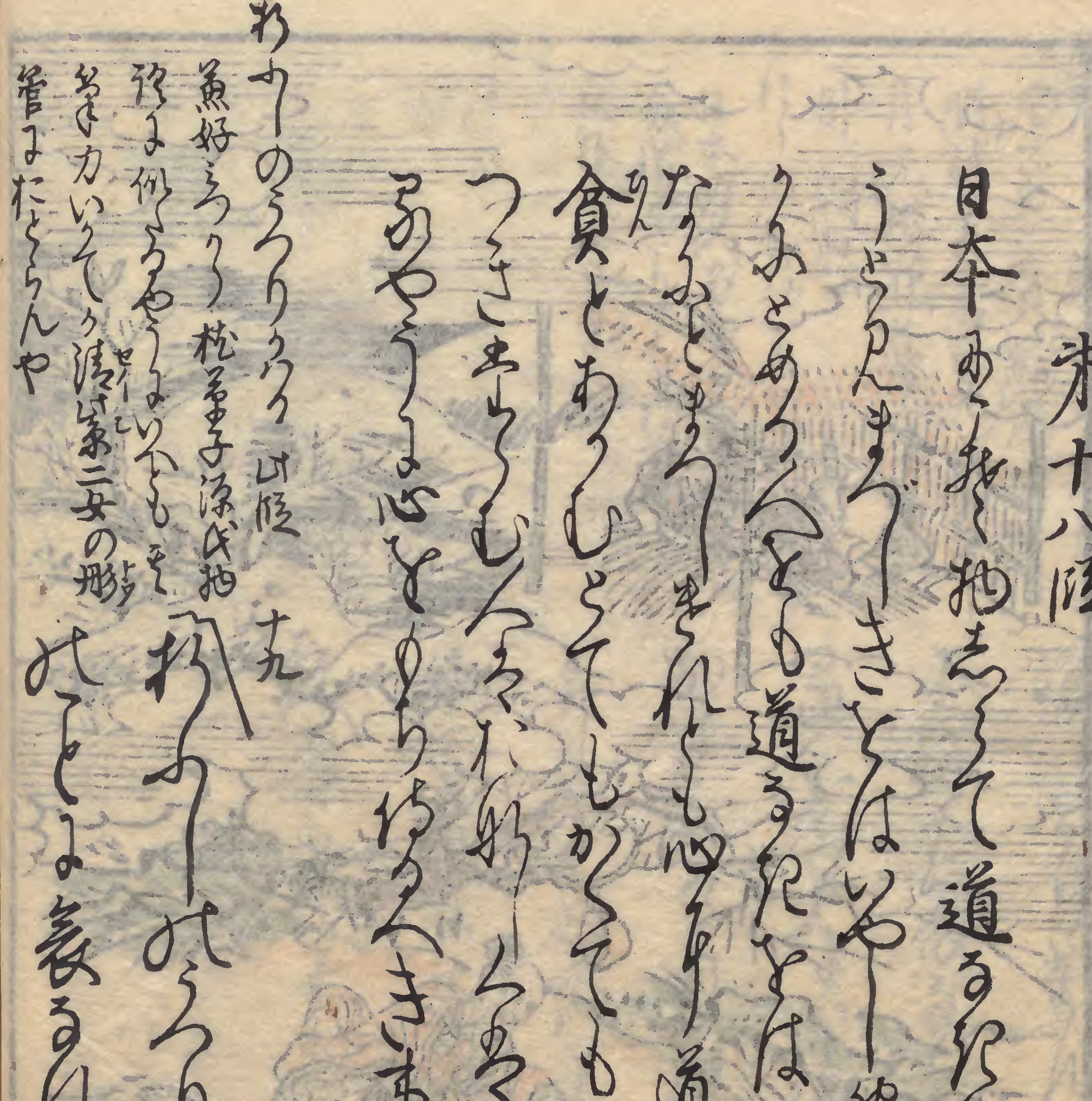
孫晨　蒙求ニ云ク孫晨字ハ元公家貧シテ織テ席ヲ為業ト明詩書ニ為京兆ノ功曹ト冬ノ月無被有藁一束暮ニ臥シ朝ニ収ム

これの人は詠りも作り給ふ

日本の人は書きかくすれは物語なりも作りまし

にやさとし

涼しかりきん。孫晨は冬月よるもふすまなくて。藁一束有けり。夕べにはこれにふしてあしたにはおさめけり。唐の人は是をいかしいとよめて世にも伝へけり。これの人は讃ても作りなん



第十八段

日本にも我をわすれて道をしるゆへ富(とみ)をはた
うとうんまづしきとはいやしゆへゆへ唐にはい
くふさあれへども道をしらぬをは濁冨(だくふ)といやしめ
なまふとかれしきれども心に道ある人をは清(せい)
貧(ひん)とあつむとてもかくてもまづしく生れ
つきたらむ人をなれ我しく清貧の名をと
あやうる心をもちゆべき事なり

おりふしのうつりかはる 此段
兼好みづから枕草子源氏物
語を例とせられしよしなれどもそ
筆力いまそ清少(せいせう)紫二女の形(かた)
管またたゝらんや

第十九

おりふしのうつりかはるこそ
ものごとにあはれなれ

ものゝあはれは秋こそ増れ
春はたゞ花のにほひ人は咲みたりと思へるにもあはれは秋こそまさるなれ 源氏にも春秋の
あらそひは昔より秋に心よするかた人はおほかりけり 白楽天か詩 大底
四時心惣苦 就中腸断是秋天 のどやかゝ 長閑とかきり
やう春めく やうやう春めくうるや二月のころをいふ
それもさるものにて 是はそれにもまさる意也
花たちはなこそ さつきまつ花橘のかをりける
むかしの人の袖のかぞする 花橘の昔の
事は詩歌の事をはいひ 花橘の昔
思ひ出さる事をいひしもなを
梅の匂ひは昔もこひし
きとなり
梅の香あかぬ色をもむかしにて
おなじ形見の春の夜の月
冬よりもかこそあはれと おもひしに
たゞそそかまし やどの梅そも
雁伝のころ これよりなのたと

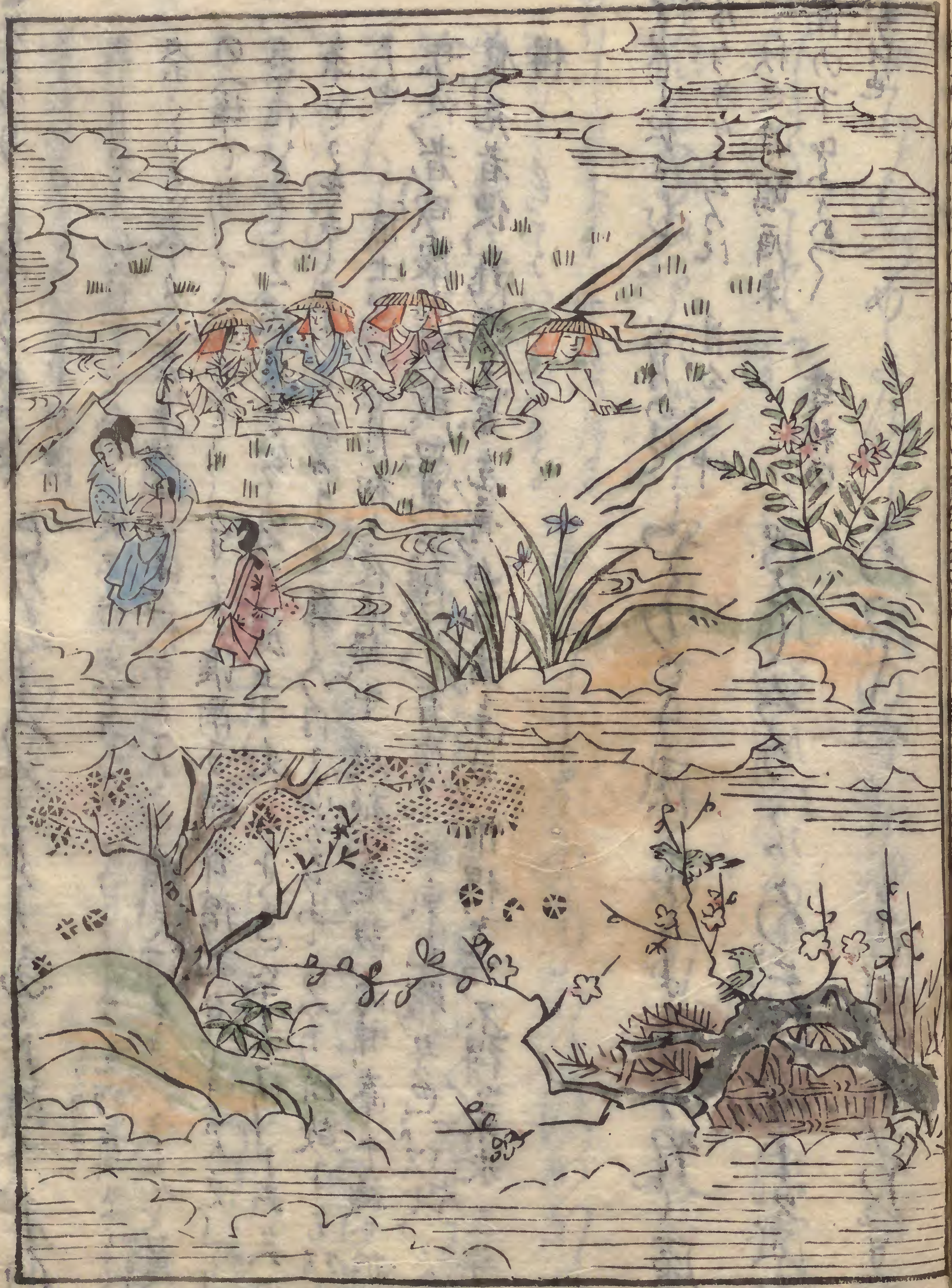
秋こそ増れと人ごとにいふめ
れど それもさる物にて今一き
は心もうきたつものは春
の気しきにこそあめれ。鳥の
声なども事の外に春めき
てのどやかなる日影に垣根(かきね)の

ちなみに灌仏ハ四月八日なりと
いふハ仏生会ともいふ推古天
皇よりはじまれり釈尊倶
毘藍城にて生れさせ給ふ
時天竜水をそゝぎてあらひ
まゐらせしことを表して
祭のころ かもの祭とき
四月中の酉日とさだまりし欽
明天皇よりはじまれり
あやめのかつら 天平十九
年五月に勅ありて百官
諸人ともに菖蒲の縵を
かうしかけさせんとのち
宮中に入ことを定めら
る弘仁式にも五月三日平
旦に菖蒲のこしをさゝくと南
殿の前にさくとあり
拾芥抄云五月四日主殿寮

草もえ出るばかりやさしきにか
く霞こもりて花もやうく
咲しほれきぬるころあまた打
しも雨風うちつゞきて心あ
わたゞしくちりぬるねびまさる
にすりもてゆく川に口なし
そのころうちやますぐに梅も
名にこそおへれると梅のあけ
ありやましくれにもたちかり

葺蒲東殿舎菖蒲事文類聚前集云端午以菖蒲或屑泛酒
早苗とり きのふこそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて秋風のふく
水鶏のたゝく たゝくとハ鳴をいふ まことにたゝく水鶏のなたかし
しきていきぬるらん
あやしき家の夕かほの
源氏夕貌巻にかの白くさ
けるをなん夕かほと申侍る
ものゝ名ハ人めきてかうあや
しき垣根に咲侍るとや
蚊遣火
さつきのやみいぶせきかやり火に
もえぬこゝろハ夕かほの花
詩学大成 牧詩幾回揮扇
摩難撃総被薫炯即使除
八雲抄に云六月祓
六月祓
邪神をはらへやはらぐる
かうしと云し河辺によし
よてあさの葉をなでて

思ひうかひ出られて山原のの
きよけに咲おほつかなきさ
ましらずして打ひきそか
たき事なりし灌仏の比祭の
比あやめの稍涼しきにさく
ゆく頃そせのあはれもへの
思ひさもまされと人のあか



すゞしさ夕又秋まつことし
賀茂川のみなそこ清て照月を
行てむすばんや夜々へまし
むかしハこふつきさるへしるに河
原にまかり出て月にあり
きを見てすゞみをしるを
六月晦せそこすみて照月
如何為へしとあり定家卿
注云六月祓明月之中人然
之古人六月之比必出河原臨
禊又納涼及絲竹之遊及詩
歌之輿恒例也不限晦日是

せられしこそけにさるものなれ
五月あやめふく比早苗とる比
水鶏のたゝくなど心ぼそからぬ
かは六月の比あやしき家に夕
がほの白く見えて蚊遣火
ふすぶるもあはれなり六月祓又をかし

祢ニ皆月祓ト長元之比或人記ニ請倉ノ小舎人来テ可参ニ皆月祓之由催之件ノ祓ハ
六月十三日也公事根源ニ云大祓ハ六月晦日百官ことごとく朱雀門にあつまりて祓とす
る也六月十二月二ツあり天武天皇の御時より始まる也又今日家々にて禊をこゆ
ほ事也 みな月のなごしのはらへする人はちとせの命のぶといふなり 此歌
を唱へて祓へ侍りし法性寺関白の記に ほどもなくすぐるつきひとぞあ
さの葉をきりにきりてもちくへつゝ此こゝろを詠まるべしと見えたり 六月

七夕まつり　是より秋の

七夕まつるこそなまめかしけれ

ことしやいかなり公事根源天平勝宝七年よりそはしまりし乞巧奠ともいふ七夕
去七月七日の夜をいふなり烏鵲天河にはしをつくりて翼を
並ともいふ今夕ハ牽牛織女の逢夜なれハとて淮南子續斉諧記にしるしはへる
のへ橋とわたして織女をわたすといへり
香花をそなへ供具をそなへて庭上に文をかき糸のはしに五色の
糸をとりまとて年ことのつまに三年乃内にねかふ事かなふといへり故に乞巧と
ト也　風土記曰七月初七夜洒掃中庭施几筵設酒脯牽牛織女相會
守夜者咸懐私願或見天漢中有奕々白気光耀五色以此為徴
應見者便拜而願乞富乞壽無子者乞子唯得乞一不得兼求三年乃
得

やうやう夜寒になるほと雁
なきてくるころ萩の下葉色つく
ほとわさ田かりほすなと

八月の比　月令云仲
やうし秋さむし
雁なきてくるころに
秋之月鴻雁来
季秋の
萩の下葉色つく
比也

とりあつめたる事ハ秋のミそおほかる。又野分の
あしたこそをかしけれ。いひつゝくれハみな源氏物
語枕草子なとに。ことふりにたれと。おなしこと又いま
さらにいはしとにもあらす。おほしき
事いはぬハ腹ふくるゝわさ
なれハ。筆にまかせつゝあちき
なきすさひにて。かつやりすつ
へきものなれハ。人の見るへき
にもあらぬさそ捨れまし

ありしき事　世継の序に
おほしきこといはぬハけに
はらふくるゝ心ちしける
かくまうてハ世の中のさまを
いそきもしくられハあるを
かりてハ心ひかれけるを
かいやりすつへき　書りすつ
ふし
すさひ　願と同し
すさましき物して
源氏あさかほの巻にはかく
まつけてくめのなとうちすさめ

むかしのさうしにも冬の夜の月は昔のむかしよりすさまじきためしにいひ出せるかれこと見ひとつされたりけるさもあはれなるものになんされすさましきためしまつひをそきえんの心あさらにてみるそ海きさあきさせたまふに　河海云　清少納言枕草紙にすさまじきものにしはすの月夜おうなのけさうして十列冷泉に十二月月夜扇にあり

きえて秋にはなさくぞとかるましるれ汀のかたよりむかしちりせてはとそ霜いと志ろうときらめりたゝやりみより粧ひこそ机しまれつわれそてくゝといふきさのつ所は海うたなくおとされする。すさ海りしき物にして見えひとも すさき月のさむけくす

御仏名　十二月十九日より廿一日まで三ヶ日なり　或ハ一夜も例あり　此仏名を云ハ三世諸仏の名号を唱へて六根の罪を滅するなり　あまさうや宝亀五年十二月よりはしまり承和の比ハ毎年仏名三ヶ日の間ハ諸國にて殺生禁断のよし　格に見えたり　公事根源に載たり　元亨釋書九釋静安従西大寺常騰学法相居比良山讀十二佛名經礼拜懺悔其聲聞帝帝嘉諸州聞有聞者具奏敕賜僧官承和五年奏置宮中季冬佛名懺

めつらしきのまゝりれてこそ侍れ　うきことのかはれ仏名前の

誠は仏名経にとくところの功徳ハかきり

荷前　十二月吉日を撰ふなり十三日になりぬとて宮より使ハ公卿のも殿上人のもあり　荷前とハ十陵八墓に年の始りに幣帛をたてらせたまふ也十陵の第一ハ天智天皇のやましな山城国山階にあり　昔此帝御馬にめされて山志なの里に行幸ありてそのまゝ還御なかりさゆくゑしらずになりて崩御をいつともしらず　唯御沓のおちたりけるところを陵となしてけるいと不思議なることにて侍りき　其外ハ白壁天皇の田原のみさゝき　崇道天皇の八嶋の陵　仁明天皇深草乃陵なとなり　さのことハあまたすなは及す　延喜式祈年の條乃祝詞に荷前を

まてる門松とよめり　伏見の里とう。あられ物やん

公事　禁中ふおゐりくまつりごと　ことなすき。公事とも云けく。

追儺

月晦ふ行わる今日ハるや　公事根源云十二　まれいうき」はさり那まそ。

子夜られそ大舎人寮鬼　とよ刃りあとふちうて海

とうとめ陰陽寮祭文

とよんて南殿の邊よつき　ういうしきや。追儺より四

てよむ上卿以下是をを

ふ敷上人くも御簾の方よ

立て桃の弓葦の矢そて

なる仙花門より入て東庭　方拜まつくらそおりる

とつて瀧乃戸より出つ今夜御不なしとぞし次を多くしとそす東

庭朝餉臺盤所のまへ乃みさりよ炮基臺を立すりるそくとと

すて追儺と云ハ年中の疫氣をちらふ。そ鬼とらふハ方相氏のごとし

四目あそておうろしきある面ときそてよ楯矛をもちて侲子とて

廿人紺の布衣着たる者を率て内裏の四門とまわりし慶雲三年十

二月よ初まりけ年天下よ百姓多く疫癘に悩されけり故へ

四方拜

公事根源云元正乃寅の時天皇屬星とときへ天地四方の山陵

を拜給て年災をそうひ寶祚を祈りましく義まてゆるやけまいらう

たゝしまりとも見へずに仁和五年正月寅ノ刻よ天地四方屬星山陵を

拜しあふ由宇多帝の御記よわまさゝも溫觴とハ見へらすす又星ハ天星

而と祈たまふとて南列河上よ行幸ありて四方を拜し給ひけ

むハ丙五日まてふりまう由月中紀よ載られく是すとや始まりし

へりん其上屬星を拜して災難を除く數ハ天地瑞祥志といふ書

にも見へたり　足を見よまふ　いそうしくありくさやき

あすきんへのうつ秋とらむまる　きれつてしきり乃秋いそうく

むまつう年れたりりよ承みそう

そふもてまうやあざんとむまん　うきふまれともをとして秋

立ハ菟鬼と云く

明のゆく宮のあしき

年の頭まてとのひつく　まてすく流まて人乃門たて

しそう又喜ま立クへわさう

とくとうすよ以浪の發　きはりてありきてなふ

端よ折るのえりりいろ

と出しうゐによく礼無　事まろわんとくしていく代

せりさんる文字よ出来も
男文字の文法よ異ならず
是を常山の蛇乃首尾相
救ふといふ又は源氏狭衣
との両よ源氏枕草紙の
例をひくをもゆるやうよ
してつましぬ筆法也
大路のさ海松よそふへし
素寂孟嶋の南海へかよ
ひ給ひし時宿を巨且将来
まゐりかひければしか
なしと蘇民将来やと
とりしなりつを後ゐるい
ふりて巨且をころし其
家をおろふさらうこれを
後の世までのあらし
とせんとて巨且の墓の
上よ生る松を年の始
よ門よたてしにしは事清
明の簠簋内傳よ見え
たり

のこりておもしとをしよ海とよ
腰つくよりさすらに落ちて
まりわるさ手の名残も心
うちねたきへのる数として玉
まつるまさるされば絶たはなき
どおもれたよい絶ゆらこ
とまでおもふしそいふれな
てもしかくて昨日も見れし
し昨日よかぞへりとは
見えまどしきさくへめぐりき
ひちらすら大海のさ海松た
てもしてさそやうたこまき
しきあふかへてまさあたし
書なれ

第十九段

此段ハ一とせの春秋に毎月をあてゝ
までおもしろく侍る古き草紙とはこれもある
事なれどかやうにあつかしくまとめなして
書つゞけむ人ハちからきしありてへしとも枕草
え侍しとても又おほはやきの御とに光源氏
のことくすつる抱つるまとかけと御しつくとも
出くはらへき筆のいさほひとはさりに田舎
めいたむのひつき心にや侍らん書あかとも申くま
しく侍る

廿七

すみうしとおもひはてにし世をすてゝ
人のこゝろ世のわろしとしらぬ身
よたゝ花の名ありけるにすてし
きもいかゝすてはてゝまさも
見てぬへきれ

此世のわろし　古今に
世のうきめみえぬ山ぢへ入る人は
おもふ人こそほだしなりけり
とらぬ身は　こゝろあるもなく
そしれなきの　雲月風花に
みだれしきとし　李白蘇
放乃謫仙人なれとも餘春
を惜むことあり

第廿段

此段の次第とは心得ぬ人ありけるにや此段の
四季折々の天のけしき此世すては妄執なるよ世捨
人もさまざまの春秋の花紅葉なとは心すこしと思ふ
といひしをかへりてやさしとおもとくめて愛
よかけるゑ好のこころかりくかすりね遁世者の
なりひ志くもかたく

廿一

万の事ハ月見るにこそなくさむものなれある人の月ばか
りおもしろき物はあらじ

沅湘日夜　三体詩載叔倫
詩ニ沅湘日夜東流去不為愁人住少時モ　註ニ云身不得去故於水之去所以深傷已之不能去也蓋叔倫事曹王ニ於沅湘有是作参サ遊ヲ
謫郴州ニ有詞云郴江幸ニ遶ル郴山ヲ為ニ誰流レテ下ル瀟湘ヘ　正ニ用此意ヲ　沅水湘水皆泉ノ名

嵆康も　山澤にあそひて
文選巻四十三嵆康與山巨源絶交書ニ云游テ山澤ニ観魚鳥ヲ心甚楽之一行作吏此事便廢安能捨其所楽而従其所懼哉
嵆康字ハ叔夜竹林七賢の其一人也晋書に傳あり
人まへく水草にきよあき　玄賓僧都の哥に
三輪川のきよきなかれにすすきてし衣の袖を又はけかさし

といひしに又ひとり露こそ猶
あはれなれとあらそひしこそをかし
けれ折にふれば何かは
あはれならざらん月花はさ
らなり風のみこそ人に心はつ
くめれ岩にくだけてきよく
ながるる水のけしきこそ
時をもわかずめでたけれ沅
湘日夜東流去愁人のため

にとくまうる事みはもせずといふ事詩をかん侍し
くあはれすつらし嵆康も山沢にあそひて。
魚鳥をとかんれんぴんのよふといふかく事く為草
きよ花不みさ海よひありきたうえかわぴんすく
さむ事ハおゝし

第廿一段

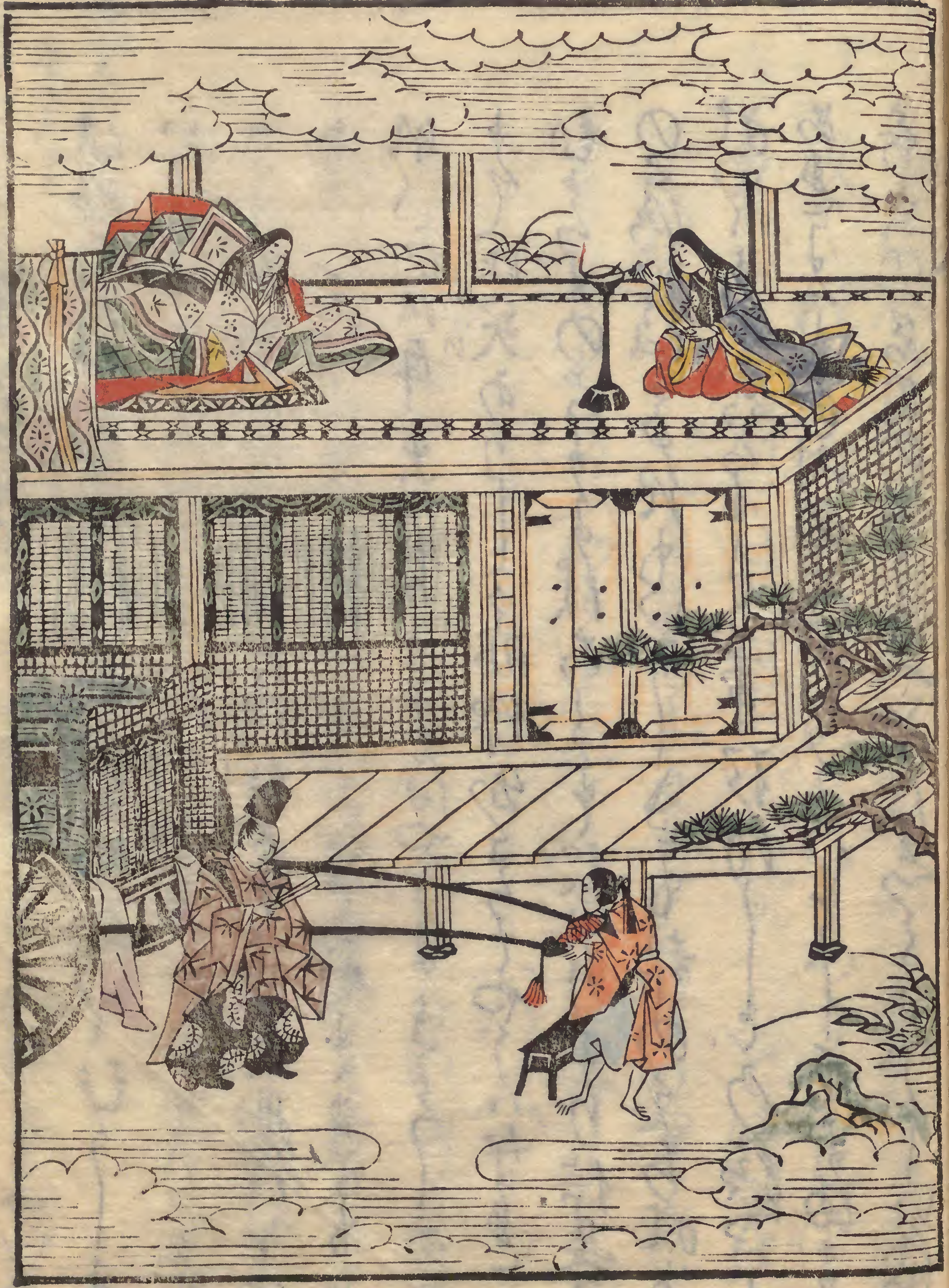
よのつね人にて抑聞のありさまは心をとゞ
めて身のしるしともて閑人のこのみこれハ人の欲
まぬ風月花草のいさゝかなるきをも見てなく
さみとして東坡が赤壁の賦にも此心見えたり
山宗のなりしろきて明月のさえたるとはい
うほと我りのふとうりておそへとも ともなんの
らそふものもなきとなり玄賓の詠哥
康が詩とて出してむめしまえもるも兼
好法師の心のうちは賤すてよくさへまし侍り
及てすらうしやまりしくてそ侍る

木の道のたくみ　大工番匠の類也
文の詞　文章或ハ往来消息を云
反古　反故ともかくとものをかきちらしたるかみのき紙をいふその多くあつめたるをも反故堆といふ禅録にみえたり
いふ詞　平生の常談
主殿寮人数にて　主殿つかさハ殿の行幸の時火をとりてかをともすをつかさどる
最勝講　一条院長保四年五月七日に始てとこなへる吉日を撰て五ヶ日あり清涼殿にて最勝王経を講せらる東大寺

何事もふるき世のみこそ志
たはしきいまやうハ無下にい
やしく成ゆくめれかの
木の道のたくミのつくれろう
つくしきうつハ物も古代の
姿こそをかしと見ゆれ文
の詞なども昔の反古どもハ
いみじきたゞいふ詞もくち
をしうこそなりもてゆくな

興福寺延暦寺園城寺
四ヶ大寺の僧衆参りて
きこゆるふかり説義論
師臨席ありと云事根
源ハ詳也
御かうのろ　御講の座之
最勝講の論議を聞召
事を云座ハいかりとあり
関白の内東まて休息を
所々を直座とも云こと
一直ハ宿直乃義也

いにしへハ車もたげよ火かゝげよとこそいひしを。今やうの人ハもてあげよかきあげよといふ。主殿寮人数だてといふべきを。たちあかししろくせよといひ。最勝講の御聴聞所なるをば御かうのろとこそいふを。かうろといふ口をしとぞふるき人ハ仰られし



第廿二段

此段ハこゝの百姓の内の人の抱て もりしみかゝるまてゆく事なかりしさてかゝり九むりし九條禅定殿下の御許めて源氏抱(?)と続あつひ作しみすかほふよむとなるもあ此さの流耳おはぐろすまゝ家やうよさるしめそよそれ笑ありしく赤作出しよりてやうハたまゝがむかしよりのはあるをそれより信長公の為後きもいやしきも都のうちれを此いうれかゝまよる事抱しと乃給へうとあまよまて当時の人のなかほしていよ雨まて奇出の名同のとらのよとはさることし候

京の人のふうちのもの申さるゝをふをきゝてま或人これといふは我たの字をかくるまたと云事をハたかうとかこのうましをゆめて下のうまーとするゑくへ申さるあしかやうの世もこといくらをいかにそとかうして九ヶ耳まさへぬかしく作まいこれをいふへ乃人々からにきゝせあいくまハいうそかかあしくたほしめさまつむ心あるむ人へハ此段をゆらんしてはそらしすみんあるかへきま事なりまつ代までのいましめんかくきをくわしとみてそりわとろゝてうつ来の世ともいへ

九重　都此内を云一条より九条まて有り長恨哥に九重城闕といへり　六三

よろす　世とそるれる
義也
露臺　内裏御殿の東也
名也
朝餉　清涼殿の内也南
にあり
朝餉間二間也こゝにて朝
夕供御をきこしめす南に
半敷二枚東に絹の屛
風を立夜御殿の方に副
障子あり此屛風の内外に
御調度を置く　禁秘抄
河海なとに詳し
或小殿なる小門　一本にあるに
殿を南殿とするは非也
内裏の殿門数多ある故に
つゞまる名をいへるなり
又名ハ禁秘抄捨芥抄に

と猶九重の神さびたるあり
さまこそよづかずめでたき物
なれ。露臺(ろだい)朝餉(あさがれひ)何殿(なにでん)何門(なにもん)な
どはいみじともきこゆべし
あやしの所にもありぬべき。
小蔀(こじとみ)小板敷高やり戸など
もめでたくこそきこゆれ。
陣(ぢん)に夜のまうけせよといふ
こそいみじけれ。夜のおと

小板敷　名目抄に神仙門
中を云今ハ殿上にあり
高遣戸　今ハ清涼殿の
坤(ヒツジサル)の廊下の間にあり
陣に夜のまうけせよ　設ハ
焼火など用意すること也
又御かゝげとハ灯のかゝげさする
への説
かいともしとうよ　あるまへに
火をかゝげよとおほせとに
とく陣まてハ夜のまうけ
をとのふ夜の御殿にてこそ
かいともしと云とよまけるり灯をとるよりていひくさり

とのをばかいともしとうよなど
いふ又めでたし。上卿の陣にて
事おこなへるさまはさらなり。
諸司の下人どものしたりがほに
なれたるもおかし。さばかり
寒き夜もすがらこゝかしこに

禁秘抄云夜御殿四方ニ有妻戸南大妻戸一間也帳同清涼殿ニ東枕御畳
御座敷也御枕ニ有二階奉安御剣神璽皆有覆蘇芳也御剣東南帳
四角有燈楼又帳南西北ニ敷畳為女房座ト河海云夜御殿の御帳の四ノ
角に燈楼あり搔燈とて夜の火をまゐらする也宝剣神璽の御かた
めなり

上卿の陣にて　上卿とハ大臣大中納言等の公卿の陣にて惣奉行するを云節会の時ハ内弁とも申し
諸司の下部とも　諸司とハ百官職寮司等を云之をハ人とハ諸司の下部の人を云し
徳大寺の太政大臣　實基公也

しこにねふりゐたるこそお
かしけれ。内侍所の御鈴の音
はめでたく優なるものなりと
ぞ徳大寺の太政大臣はおほせ
られける

第廿三段

先段にハ人の詞いでのかハりゆく事をいひし、此段にハさま〴〵の大内の儀式ハむかしにかへらねど結構なるていたりをほめてハ大内裏なりしゆへなるべし

廿四 斎王の野宮におはしますありさまこそやさしくおもしろき事のかぎりとハおぼえしか。経仏などいみてなかご染紙などいふなるもおかし。出

経仏などいみて

延喜式第五斎宮忌詞内ノ七言 仏ヲ称中子ト 経ヲ称染紙ト 塔ヲ称阿良良伎ト 寺ヲ称瓦葺ト 僧ヲ称髪長ト 尼ヲ称女髪長ト 斎ヲ称片膳ト 外ノ七言 死ヲ称奈保留ト 病ヲ称夜須美ト 哭ヲ称塩垂ト 血ヲ称阿世ト 打ヲ称撫ト 肉ヲ称菌ト 墓ヲ称壌ト 又別ニ忌詞 堂ヲ称香燃ト 優婆塞ヲ称角筈ト 同才

六斎院司九忌詞 死ヲ称直ト 病ヲ称慰ト 泣ヲ称塩垂ト 血ヲ称汗ト 宍ヲ称菌ト 打ヲ称撫ト 墓ヲ称壌ト 又一説ニ仏ヲ称保称とあり 又よらすくこともいみて詞花集雑部に選子内親王賀茂のいつきときこえけるときあやむむかひてよめる 思へどもいむとていはぬことなればそなたにむきてねをのみぞなく

すべて神の社こそすてがたくなまめかしきものなれや。物ふりたる森のけしきもたゞならぬに。玉がきしわたして榊にゆふかけたるなどいみじからぬかハ。ことにおかしきハ伊勢。

榊にゆふかけたる 榊とハ賢木ともかけり 八雲抄榊 かえてふ志らか付たるをいふも ゆふハ木綿四手麻幣也 神道家に沙汰ある事也

加茂 雷神と下加茂ハ御祖神と継とや也 上加茂ハ別雷神と

伊勢 天照大神の廟

春日 四所ノ大明神者 第一殿武雷命 第二殿斎主命 第三殿ハ天津児屋根命 第四殿ハ姫大神也

平野 山城國葛野郡にあり 延喜式に平野神四座 今木神 久度神 古開神 神護景雲二年大和国三笠山より四神をうつしめて跡をたれ給ふ

相殿比賣神と云　住吉　日本紀伊弉諾尊日向橘檍原にて禊し
此時海底より出る三神也　三輪　大和國にあり日本記に素盞烏の子
大已貴神を大國主神とも申其魂魄出雲国より大和国三諸山へうつり
給へるゆへとそいへるとて是を大三輪神と申　貴布祢　木船とも
書る山城国愛宕郡にあり諸神なれと晴をいのるも雨を請ても此社
を祭なり　吉田　此社春日明神を勧請ありし　大原野　此山を
小塩とや文徳天皇時始て此祭を行ひ春日と同体也春日ハ祖神きさき故に
后妃也人系統のたよりわかんかためようしやさらとも
松尾　大宝元年秦都理をしめて此社を立すり　日吉　三輪當社
皆同体の神也
延喜式巻九ニ神名帳山城国葛野郡松尾神社二
座とあり
梅宮　山城国にあり橘氏の祖神也

賀茂。春日。平野。住吉。三輪。
貴布祢。吉田。大原野。松尾。
梅宮

第廿四段

人王十代目崇神天皇と申御代より神代をざりてそ内侍所と号し同じ御門の御まへしまします事をおそれ給ひ御鏡をあらたしく鋳させ太神宮の御殿のうつりまし給ひぬ鏡をは大和姫にいつかしめくみをすそ河の川上にまつり給ひしより斎宮と申事はしまり斎会のかはりたる給へは斎宮もかはらせ給ふにより斎宮の御うるの時まて大極殿にて天子見わけ斎宮に二あひ都への別れの御まくしわたくさしぐしをまいらせ源氏物語にもかかりここしもかくし けんやくなりある事やまつりしめれさしふ平定とかく御かうしあらまそしうけれうりまけてせ給ふ姫宮を宮川にて流されうへせさせ給ふ内裏の内乃用清の陣にて忌竹をたてて二とせあけり又流されしへありて嵯峨の野宮まうつし奉り三年めに伊勢へ流つりまあるなり御門のかうせ給ふをはきやしかめして院の御まはみゆきとて此斎王の御向をは行啓といへり長奉送使まく申うくいふ御きは侍まわるなり久しく絶たる事なれはとは其儀式をもあらくへしあはしさんかし其代まてはありしと見えてむなま斗のたしたまりさうある

飛鳥川の淵瀬　古今に
世の中はなにか常なる飛鳥川
昨日の淵ぞけふは瀬となる
飛鳥川ふちにもあらぬわが宿も
せひろめてし人はみなれし
時移　又同序にときうつり
ことさりたのしびかなしびゆき
かふともこのうたのもじ
あるをや
陳鴻(ちんこう)長恨歌傳ニ時移事去樂
盡テ悲來ル
野らと　野原也　萬葉にも草の字
かけり
秋のこと讀ミ又野等とも
かけり
里はあれて人はふりにしやどなれや
庭も籬も秋の野らなる
桃李ものいはねば　史記李廣ガ
傳ノ賛ニ桃李不言下自成蹊ヲ

飛鳥(あすか)川の淵瀬(ふちせ)つねならぬ世にし
あればときうつり事さりたのしび
かなしびゆきかひて花やかなり
しあたりも人すまぬのらと
成かはらぬすみかは人あらたまり
ぬ桃李ものいはねば誰とともにか
むかしをかたらんましてみぬ
いにしへのやんごとなかりけん
跡のみぞいとはかなき京極(きやうごく)殿

昔三品詩ニ桃李不言春幾暮
煙霞無跡昔誰栖
京極殿　拾芥中末ニ云京極
殿ハ土御門南京極西南北二町
秋ノ入道長家或ハ大入道殿家
上東門院是也
法成寺　五條河原にあり
後一條院行幸しありしを
ことゝ栄花物語にあり京極
殿とハ宇治関白頼通公をさし
給へと道長公の御遺言ありし
志とゞまり事変じ　昔の
まゝ人の後は世までとまりい
とく志はとゞまりて事
物はうつりかはるべし
庄園多くよせられ　道長公
御病中に法成寺へ庄園おほく
寄附せられること栄花物

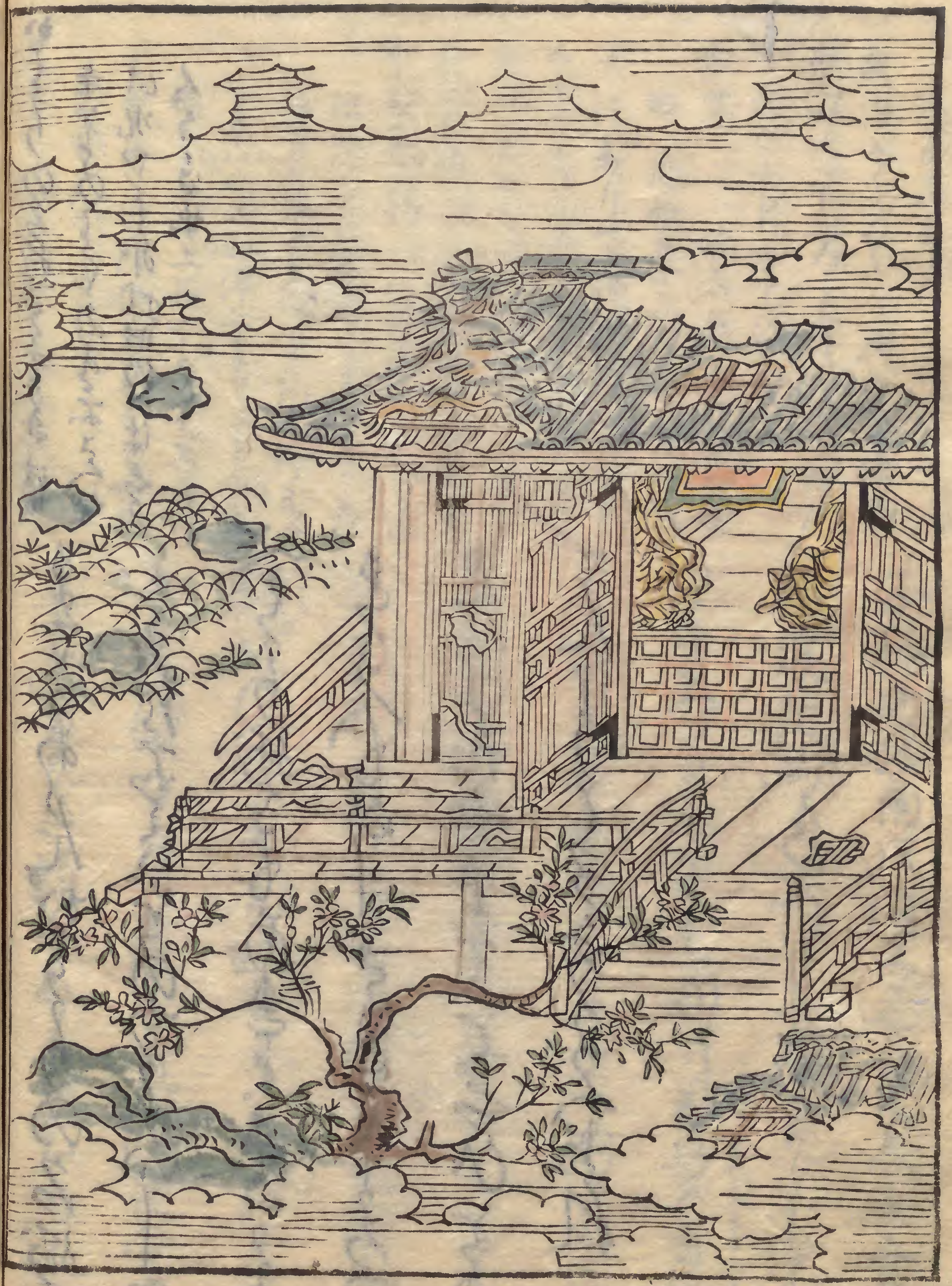
法成寺などみるこそ志とゞまり
事変(へん)じにけるさまはあはれなれ
御堂(みだう)殿の作(つく)りみがゝせ給ひて庄(しやう)
園(ゑん)おほくよせられ我御ぞうのみ
みかどの御うしろみ世のかためにて
て行末(ゆくすゑ)までとおぼしおきし
時いかならん世にもかばかりあせ
はてんとはおぼしてんや大門(だいもん)金
堂などちかくまでありしかど

徳にあり
飛鳥井どのゝ　飛鳥井曽孫也
帝のいまだしろしめす世のころ　摂政
関白大臣などの義也
金堂　倭名集云仏殿金堂
也　風雅集ふかくの左法成
に参りて読侍りける御
かへりごとにみかの世のこるは
ちりもなきことのはおけ
正和の頃　花園院の年号也
無量寿院　法成寺にあり阿
弥陀仏を安置せられし故に無
量寿院と名つく仏九躰は
上ハ九品の浄土をかたどる事
相なるとも上品中品下品なり
めでたし此院作られしと世継
よりもなりけり
丈六　仏のたけハ一丈六尺あり

正和の頃南大門かさやまだ金堂ハ
其後たへまじりけるものなりてど
つきけるさまもおかし。無量寿院（むりやうじゆゐん）
ときりかゝりてあかりける。
丈六の仏九躰いとたうとくて
らひかりしまそす。行成（かうぜい）大納言の
額（がく）がゆきさらかまれ扉（とびら）おきやう
よ見ゆるを哀なり。法花堂か
どもいまだ侍るめり。是もまた

かゝりの名どころにまき　法成
寺ほどのとくの名のみ残るが如
此況やみなの此旧跡ハ法成寺
人なき也

ましてかくおかん。かゝりの名なた
よりかなくてハ。そのつかひす
へかく形つるもあまたとざそふたゝ
ものへもおかしきさまところつよ
見さうん世まれと。さひとき
てんつうそうかへまれ



才女五段

古今の序のよしみふかり朗詠集の桃李の詩を守
もくゆきそておもいてまうつ古跡をみるやうふかゝり
織ふ花の拙きに代ることをはいつふむかしのよ誠を
たまのしと詠をし心を見んとゝり世中よ久くもて
偽るものは寺林之ちつも道長公の庄園れけくゆゑを
てふそて頼ふといへともほゝ形くのことなるとか
きるん下ころよの常の人乃感應するよ心を流
くまはおろのれの後やといさ此さる段をねも
ちまと侍り

風も吹あへすうつろふ人の心の花ま
古今よ貫之か哥
桜花とくちりぬともおもほえす

風も吹あへすうつろふ人の心の花

人の心は風も吹あへぬ
色みえてうつろふものは世の中の
人の心の花にぞありける
うき世にかはりゆく　世の中
のかはりにうつりかはりゆ
くるしいすま人の別よりもか
なしく覚ゆるなり
白き糸のそめいろによりてかはる
高弁上人白絲を人の心またと
よそへ給ふとよめり　風雅集
むかしより人のこゝろを白いとの
そむるまゝにうつるなるらん
淮南子曰楊子見逵路而哭之為其可以南可以北墨子見練絲而泣之為其可以黄可以黒高誘註曰憫其本同而末異

ふるされし年月をも心の袋と
きこしめしけるにもたえず
ぬれつゝわかれかふるさとゆく
すゑひとつすぢ人の別するをも
まさりてかなしきおもすれば
いさゝかきよきそめしも浅る
あしたをみちのちまたにてなる
きんてことゝるゝ人もありけん
り。堀河院の百首の歌に

堀川院百首　あまの百首あり
なるの百首は権大納言藤原公
実勧進之うたにてありし
もろこしの哥人の三郎のうた
墨染の頌し

むかしはいともちかきを見なは
つらぬきしつとれすゑれのにて
さびしきをしれさらにと作り
半ん

第卅六段

此發端の書出しやう古今の詞ひかをとりて心をしらう
かむもおもはかゝまゝ作り出されの筆勢也此言ハあやしく乃
櫻花とちやくうつろふものはなにしおいにける言葉ふ
の下より紀貫之のすゞみ出されし名言やみいおく
そのむかしれのこゝまで争ひかんたくられもいなし
らひと文章までもけしき段す主堀川院の女
房の御百首のうちよあまた名言あつふさ侖て
人のめくりよもすゑやのこゝをあらぬさき出
かれさる作者此言道のうけ申く挑り詠とも
いそれぬ氣味作りまけ段くの跡をみまえて古
人のゆゑ付てもむかし挑まさひて感慨

とれこもりまむあられは侍り

譲国ゆづり　天子の位を春宮へゆづり給ふ時の宣命也　譲国とも御譲位とも申し

剱璽内侍所　是を三種の神器と申し　剣は宝剣とも天叢雲剣とも申す　璽は神璽也　天照太神天の石窟にこもらせ給ひし時諸神たちの天の香久山の五百箇真賢木(サカキ)の上枝にかけ給ふ八坂瓊(ヤサカニ)之御統(ミスマル)是也　天照太神　素戔烏尊にたてまつりさせ給ひし八坂瓊の曲玉(マガタマ)とも申す　又草薙剣は素戔烏尊に日本武尊にさづけさせ給ひけるとぞ

内侍所　男子にも申す神鏡のことなり八咫鏡(ヤタノカヾミ)共真経津鏡とも申し　此後を

新院ゆかりのさせ給ひしきぬたまふ

流国ゆづりの宣命おこなはれて

剱。璽。内侍所。まうしなまつりし

移しそかきりなう心やすかりれ。

新院の御なりさせ給ひての玉よ

まゐせ給ふまる事とうや

とかくまゐらせとものゝつとゝのそはして

そうつね事は有らし

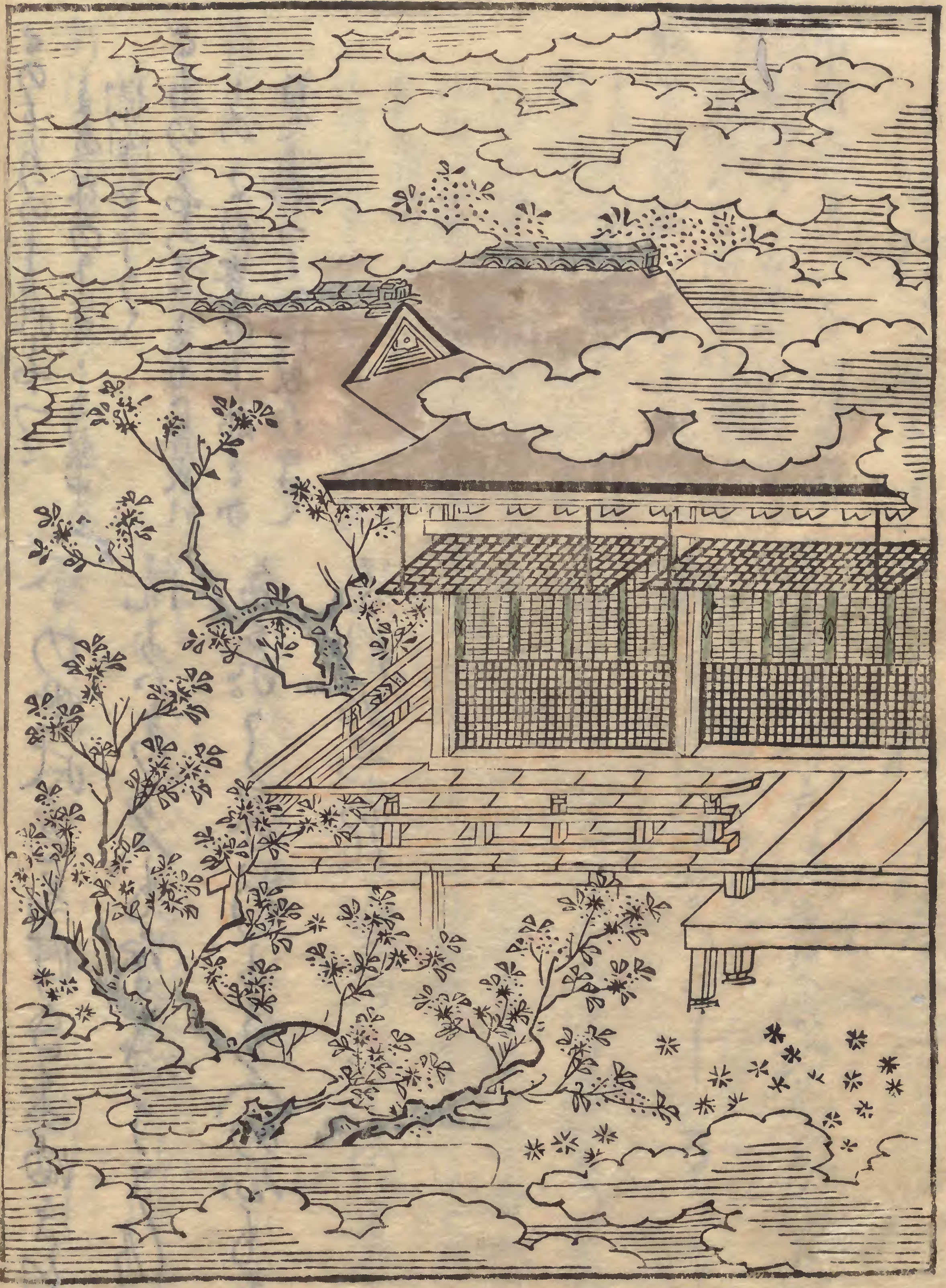
とのもりのまかやつこ　主殿寮の下司とも禁中の掃除をするつかさ　とものみやつことも伴氏の殿寮の下部とふ　はしなやつこは御奴乃字也

今の世にはとおしきまに沙汰されて

院よりまゐる人もなきさうさびしき

ありさまも折ふしの人の心もあり

それめでた



第廿七段

天か下治めまし〱し御門さへおりゐさせ給へるまゝ
いろ〱きえもやまぬていすりかやうの事とか
くもとくしお治よ貫之かうたハ手まし銭へ家記
ひ治ハ所要あハかつ折よそへ人の心もおゝくまぬへきと
かまつ一句金云るゝ人し人のよし人よのこそあり
（きこら）薙羅の古事あるや たもしあハ物らまと候う

倚廬　仏忌也とり庵て壒嚢抄云
諒闇の時の皇居也以日易月　廿八
とて十三日の御忌あり
何の字壒嚢抄云倚廬の字ハ
いましきをさけ葦の簾布ノ
木の太刀平緒其外装束等
皆非常也下説よみ字を翠簾
とくき布の帽子を布
帽額とうけり木のを

諒闇（りやうあん）の年ばかり哀る事ハあら
しいろの住居のさ海るまし。板敷を
さけあしの簾をかきそ。布の

かけうりこんのいてよあり
鈍色也
太刀 黒作にて銀のかなもの也
平緒 これも黒染なり
ゆゝしき おそれはゞかる
しきこと

あらくしく。御調度とも
おろそかに。皆人のさうぞく
太刀平緒まで。異様なるぞゆゆ
しき

第廿八段

此段ハ諒闇のしき段なり 諒闇ハ倚廬人もせぬかなしきなり
是お総の説也 志ハしきなり 三年の大喪一ケ条説
まこれあり 伊勢物語の段のおりふしの段よりゆく不
むかしの説總なりしを 孝孝法帝の時 不ま
よりてし海まりよりても さとよりむかしなり おれ
しくハ海ねくよす 記也 孝経にも 喪服の不ハ文字

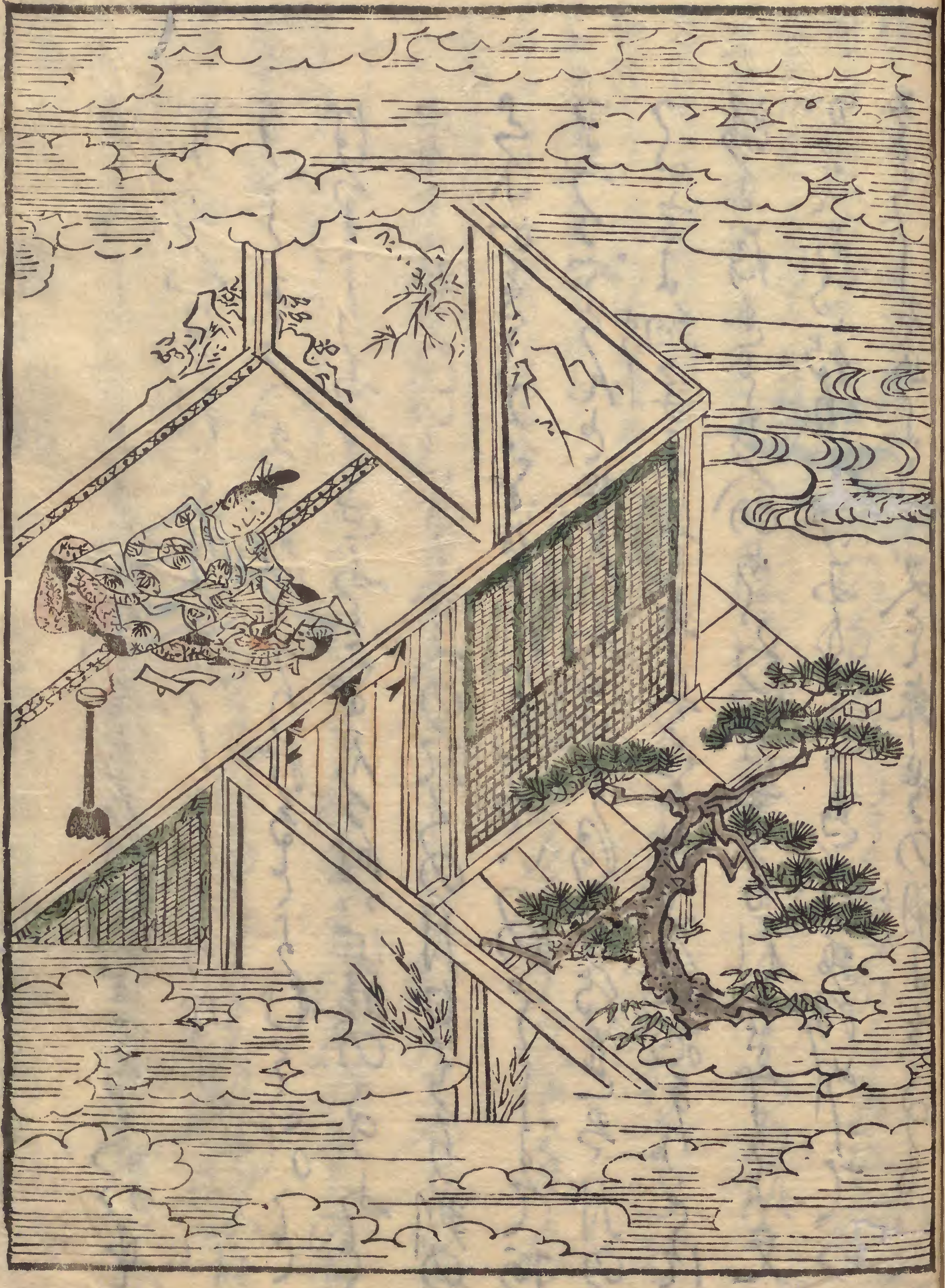
[illegible]

みしかきうひしき物かたり
あそひしいふあそひのこと
さえおりし衣装なりし人の
かとつきしくすくなき出り
人志川まうてのち 人の生
つまりらうて 後漢書列
傳五ニ來歙書曰臣夜人定テ
後とあり
すさむ ますさひの義こなく
さむんよりよのかし
なそく よ川の反具也
まきん人のまなひ 新拾遺
江侍従まりけつ男乃
かへ筏よりあつめてやりれ
つらそしよ処つ
たかまのふとつるまるのむつさハ
やるりてもまくかりり 集ま
文選五十六潘安仁ヵ寡婦賦楊

過ぎにし方の
恋しさのみぞせんかたな
き。人しづまりて後。長き夜
のすさびに。なにとなき具足
とりしたゝめ。残しをかじと
思ふ反古など破りすつる中に。
なき人の手ならひ。絵かきすさ
びたる見出たるこそ。たゞ其
折の心ちすれ。此比ある人の文

仲武謂曰披帙散書屢觀
遺文有道有寫或草或真執
玩周復想見其人紙労于
手涙濕于巾白樂天感舊
詩巻詩夜深唫罷一長吁
老涙燈前濕白鬚二十年前
舊詩巻十人酬和九人無

よみをきしくるりてはかなきわれ
あいるの年すりまんとちよ哀
すゞむしのよなれたそく
おもふもなくてかなしさし
たいとゝ哀



第廿九段

ゆかりありてもなき他人にてもあれ文をとりかはせし
その人ハさりてそハなつかしくなつかしかれ
すくそ人のことはりしけるもとよむぞれとし
けるまよりみつきたふをとるゝ時ハ此段のこゝろ
常にあはれをさぶらふ文の外くの月日をかり判の
ところかきたるを見れハいつのとしにて何
事かありけんと思ひ出さまほしく侍る也月の
ころまに細字にて年号を書つけ地ありと侍
猶よなきとも人のあとなきことなれハさすがにえ
かならず折ぞ侍りぬけふなどよき人の跡にめしておはしまし
そのかしそめよりて文に年号の所によるのもの人

三十

人のなき跡ばかりかなしきはなし。中陰の程山里などにうつろひて。便あしくせばき所にあまたあひゐて後のわざどもいとなみあへる心あはたゞし。日数のはやくすぐるほどぞものにもにぬ。はての日はいとなさけなうたがひにいふ事もなく我かしこげに物ひきしたゝめちり〴〵にゆきあかれぬ。

中陰 人死して未来生ぜざる中間に先五陰のすがたを結ぶ故に中陰と名づく五陰は色受想行識是也或は七々日乃至七日のあひだ仏事を修するに法花浄土経并無常経等によるなり
心あはたゞし 法事は君など侍念誦などいとなみて彼此そくられなれど是ろあはたゞし
河海に 心はそわたゞしと読之
周章 榎
ものにもにぬ 物にも似ず ぐるしさがきからふくるまゝ
はての日 四十九日也
我かしこげ 物散とするそお つかなかりけるとありことハ

とのすみかにかへりてそさらにか
別るゝよりて退散する
体とみえるかれていひある
なしき事ハおほかるへし。しかく
つゝきわけよりよ時のそれと
れと過る故にかあるを
の事ハあなかしこあとのため
もよふし来るへし
あるのへと　日本紀まてに
いむなる事そといへるこそ
とちてかくとよあり
河海よりかしのいひと云
かゝりの中に何かハと人乃心
義　史記汲黯傳上曰吾欲云々とあり又然くときて
いむくとよむともありそ
ハ猶うたておほゆれ。年月へて
八如此くと乃義へ
あなかしこ　下学集曰穴賢上古時倭漢両国未知家人居穴巣恙虫螫人故本朝書札末相勸曰穴賢言士窠之穴賢閉塞可防恙虫無恙と以字ハ戦国策より出たり何事もおそろしくいましめ慎む世俗の消息乃末に穴賢と書てそれを云事なりとあてたれハよくなるへし
書簡尺牘の書尾小自齋儀　齋自愛至祝珍重すと書う
も露わするゝにハあらねと

こゝし又不まよふて完
るものハ日々にうとしといへる
かきくへてと云事もあるへし
かゝりのあうに何かハ　かくそ
ことなれハさハいへとそのきハゝか
り哀傷の中にと云事さ
年月へても　源氏玉鬘巻に
りハおほえぬにや。よしなし
年月へたるこそかぬきとあり
さるもの八日々にうとし
ことひてうちもわらひぬ。からハ
さるものハ日々にうとし
文選二十九古詩曰去者日以疎來者日以親出郭門直視但見丘與墳古墓犂為田松柏摧為薪白楊多悲風蕭々愁殺人思還故里閭欲帰道無因　註曰去者謂死也來者謂生也不見容貌故疎也歡愛終日故親也
けうとき山の中におさめてさ
るへき日はかりまうてつゝ見れハ
ほとなくそとはもこけむし木
の葉ふりうつみて夕の嵐夜の月
けうとき　上の年
のみそこととふよすかなりける。

月にてもまされぬと云は　おもひのほかに志れぬ人あるも人をと
あはれての引しわすれぬと云はやむさとしろよしみもあひて気を
云そのきハゑりおかえぬはやむさとしろよ
ともあるそとし　きハちり　きハわとまとお心　かハ
死骸ハ　源氏相童にむるしき流ゝとあり
きこしとき　河海に氣疎しと云つまわらうしき事し

卒都婆　翻譯名義集第七ニ曰
窣堵波西域記曰浮圖又ハ曰
偸婆又ハ曰私偸簸皆訛也此ニ云
翻方墳亦ハ翻圓塚亦ハ翻高顯ト
義翻靈廟刘熙釋名ニ曰廟者
貌也先祖ノ形貌所在也又梵ニ云
名塔婆發彰曰説文ニ元無此字
徐鉉新加ニ云西國ノ浮圖也言ス
浮圖者此ニ云翻聚相ト戒壇圖
經ニ曰原夫塔字此方ノ字書ニ
乃是物聲本非西土之號ニ若
依梵本ニ瘞ニ云佛骨所ヲ名テ曰

こうあつめんぞもみなとすくなせ
てやすつまかつありのすゑくハ
あそれやのそおりふさうハ秘とよ
まさもさこぬまとハいつまとの人と
あもまふ志てす。年〻れまれ笑
ぬこう公あらん人ハ家をとみゆらん

きをぱそへハ嵐にむせびし松
もぱみとせをまたて薪にくだ
かれ。ふるきつかハすかれて田と
なりぬ。そのかたもなくなりぬ
るぞかなし

塔婆と　きわりし
おすう
そもおもひとおすくらせく
それもみへしも其のよ人もを
まくらせて後をはゆ物かう
そうりく
いつまでの人と名を志るせし
白氏文集　古墓何代ノ人ソ
不知ニ姓与ヲ名ヲ化シテ為ル路傍ノ土ト
年〻春草生ス
其ひとたより　そのうち
さらぬよりぬうとのう
かしきとし

第三十段

中陰(ちういん)の日数もかぎりあれば墓所(むしよ)ものちのちはおとろへすたれていとあさましきありさまなり此段を見て感慨(かんがい)おこさぬ人はあらじとおもはれ侍る

国立公文書館
National Archives of Japan